明治三十年三月十日

女學雜誌

第四百三十七號

Mai. 1897
no. 437

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百三十七號目次

社説
學問の心掛を失ふべからず

家庭
實地家政(炭の入用、倹約の方、裁縫と料理、掃除の事)
子供と金錢
子供のほしがるものとおもちゃの仕末　嶋村
女子手藝案内(三)(刺繍用器械の事)　みよしの
火鉢煙草盆の事(良人への介抱の事)(良人の歸りを迎ふる事)(まい子の事)

文藝
學の話(富野繁氏を訪ふ)
和歌(池袋清風氏)(花圃の若草)　曲浦子

隨感
維新以來三十年(女學の爲に脱落あり)(天の使那邊にある)(機會既に轉じたり)(語られぬ先生)(大美は大醜の如し)(奇蹟及妖怪)(慈愛の救ひの御手)(堅信者の末期)

講義
雛祭(昔の上巳)(雛遊と雛祭)(雛の種類)(雛遊餘談)(雛遊の將來)　長行子

史傳
史料散錄(一家康黄金を貯ふるの戒)(西郷南洲改革に困却す)(二師會論の眞相は黄金にあり)(南大閣の朝鮮征伐の一理由亦黄金にあり)(中井竹山の說)(德川氏遂に增税せず)(新税せず)

雜錄
小說磯馴松(下)　紫琴女史
片々錄(一蓄妾の悴の下の小刀)(蓄妾を大美と思ふ)(盆栽の強木左人)(女護島の風俗)(談話三則)

時文
孝明天皇御遺詔、學問の科學雜誌、英國の[illegible]、集まりくる[illegible]、武士、東武士寫眞の[illegible]

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	一冊定價 金拾錢(無郵税) 一年前金 金貳圓(一年廿四冊) 前金十錢
廣告料	一行[illegible] 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 但し本誌の體裁を汚す如き廣告は代價に拘らず謝絶す。
送金	爲替は東京郵便局に宛て小爲替にて送られたし、但し一錢郵券切手を添へて送る人は五厘切手にす
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社へ宛てらるべし

第四百三十六號目次

社説
本願寺改革論を評す

女學
孤女學院名稱を改む◎女學研究會の創立を望む◎閨秀の家庭に及ぼす感化◎作文の教授
女子教育振起の現勢◎東京下等社會の一瞥(布川靜淵)

教育
朝鮮國の教育(京城學堂報告)◎朝鮮國に於ける英米佛教育傳道事業一斑◎朝鮮官立學校概況

評論
小說家を論ず　嶋村子

雜錄
故木村志子君の靈に告ぐ　湯谷礎一郎
挽詩一首(中島湘子)◎妣論偶語(妣は衰微の際に在り、寫眞微動の妣)曲浦子◎片々錄(二)如雲
小說磯馴松(上)　紫琴女史

時文
感化事業の發達、花紅葉、近世文學史論◎教育界、寫心畫◎小猫◎新小說◎兎り種

片々◎時報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

工藤武重謹著

孝明天皇御遺德

先帝御製(東久世伯染筆)挿入　全一册定價金二十五錢　郵稅金四錢

恭て按するに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尚湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れす是れ頗る憾むへしと爲す此書は　宸翰秘書及ひ先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信す今此書の一班を示せは先つ**御一代**の章を掲け編年体を以て降誕より崩御に至るまての事迹を示し**聰明**の章に於て先皇の英明絶倫なるを概說し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は禁裡荒廢供御非薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て　先帝の聖德を頌し奉る

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　**國光社**

基督教新聞

定價郵税共一部金三錢　三ヶ月　金三十八錢
六ヶ月　金七十三錢　一ヶ年　金壹圓四十錢

基督敎新聞は基督敎界に於ける最有力の新聞にして發刊以來十餘年今や愈々改良を加へ議論の區域を擴張し其の材料を精撰し時に内外諸名士の肖像を掲け以て大に讀者諸君の好意に報んとす趣味あり光彩あり其の議論は正經にして東西最進歩の輿論を代表し其雜報は内外の敎勢を詳報す其外家庭欄説敎欄皆な有益ならさるなし願くは敎界内外の君幸に愛讀を賜へ

東京本郷東竹町三十四番地

基督教新聞社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

毎月十五日發行

歴史は絶無稀有の材料を精撰し

曙

文學は高尚幽遠の思想を發揮す

定價九錢無郵稅
（六冊前金五十錢
十二冊全九十五錢　但切手代用ハ一錢ニテ一割増）

第二號　二月二十五日發行

目次

●加茂行幸の圖（故浮田一蕙畫）
●論説
●世の同感の士に告く
●毛利元就勅を請ふて賊を討ぜし事實に付或論者の妄を辨ず
●史傳
●先帝御年譜（續）
●眞木和泉守（二）
●日柳燕石（上）
●談叢
●平野二郎（二）
●蘭岡惣助、小川幸三（一）
●復讎紀聞（一）
●戰記
●日本海岸役
●逸話
●後水尾天皇御逸事
●石清水行幸の事情（承前）
●中院内府通幸卿
●雜報
●二十九年の史學界●二十九年の文學界
●高等學校の史學研究會○考古學會雜誌●舊幕府●川志表其他數件

第一號（再版出來）

目次

●先帝御尊影
●皇太后宮御尊影
●御製（東久世伯書）
●紫宸殿圖
●後月輪東山陵圖（寫眞版）
●曙
●先帝御年譜（一）
●東久世伯先帝御事蹟談（一）
●先帝御讓位の宸翰
●加茂行幸の事情
●石清水行幸の事情
●皇太后宮　附錄
●後光明天皇御逸事（一）
●先朝雜話

寫眞版　優美了紙彩色白紙半折摺
御製は二位伯爵東久世通禧卿八作

孝明天皇御尊影並に御製（定價十錢郵稅二錢但十部以上無郵稅
切手代用ハ一錢ニテ一割増）

本御影さきに出版せし孝明天皇御尊影は大に世上の厚望を負ひ出版日ならずして一万部を賣盡し其後各地篤志家の需用に背き居りしか今五千部を増刊したりしに世需の多き右増刊も若し遷延日を過さば再び江湖の篤志に負くの不得已に至らんことを恐るゝ幸に皇德や江湖の需求默止し難く
追慕の諸君は速に御申込あり永遠禮拜候の用に供せられんことを希ふ本館は其申込の順序に依り早速郵送可仕

發行所

東京本郷區東竹町三七

日昇館

女學雜誌

第四百三拾七號

明治三十年三月十日發兌

社説

學問の心掛を失ふ可らず

人一日も學問の心掛を失ふ可らず、何事に對する時も油斷して學問の機會を外す可らず、常に間斷なく用心して新しき智識を取るの工夫最も肝要なり。

凡そ人、生きては日々の新智識を求め、之を施して日新の事業に用ふるの愉快を重ぬるにあらずば、一年三百六十有五の日數を送つて、日毎〳〵に同様の事を繰返すとも、何の面白味かあらん。身の丈を伸して成長を誇り、齢の數を加へて老功の符徴となさんに、遂に何の意味ぞ。人は、其の智力を練磨して物事の道理を究め、天地人生の秘密を洞察して其の玄妙なる機關を承知するに至らねば、眞に成長せしとは言ひがたし。二十三十にして依然たる暗愚にては、白痴を距ると百歩五十歩の相違にすぎず。折角、日光に當り、穀物を食ひて生存するの甲斐何處にありや。何人に對して恥るにも及ばず、第一、吾が心の明々たるものに對して慚愧此上あるべからず。

一藝一道に達したる長者の言行を見よ。亦是れ一様の人間にてあり乍ら、其の熟練巧妙まことに驚くべし、殆んど人間わざにてはあらぬかと疑はるゝ迄の上達なり。つく〴〵と之を見れば感涙禁じがたし。同じ人間にても、練磨すれば斯く迄に上手となるものかと思ひては、或ひは、心づよくもあり、或は、心細くもあり。人の勉强と云ふものゝ恐ろしき結果を奏するとを覺らぬものはあらざるべし。

必竟するに、是れは、勉學の結果たるのみ。人の心は靈妙不可思議にして、用ふれば天地八荒の無邊際にも行わたり、濃やかにすれば、微分、極分の最小分子の中に徹底すべし。かの人外に放逐せらるゝ盗賊の如すら、修練工夫尋常ならず。深夜暗黑の中に、人家に押入り、何物を見聞せざる先に、部

屋の工合にて金のありなしを悟ると云へり。蓋し金の温かみと云へる一種の感覺を受るとに熟練せしなり。盲人が見ることに不自由なりと言ひ乍ら、窓をあけて火事の遠近を悟るなどは珍らしからず。皆これ心を一方に凝集して之に凝り、之に練りたる結果の致す所。人は勉强次第にて鬼神にも劣らぬ巧妙絶倫の域に達することを得べき望、確に存するにあらずや。

然るに碌々として半眠半睡の躰に世をくらし、心を怠惰にして事物を輕忽に看過し、絶えて、工夫、修練、勉强等の功を積まざる族は、たとひ長命すとも三才の赤児に異ならず。日進月化の世に生れ、人々勞苦して世の爲に盡力するの最中、たゞ茫然として衣食の寄生虫たらんは恥辱にあらずや。左れば、家政に内助し、庖厨に忙しく、あまり人前に出ることなき婦女子たりとも、常に學問と云ふ心掛は一日だも廢す可らず。絶えず、注意の眼を見開き、疑問の劔を鋭くし、空しく眼前の關所を通り抜けしめず、必らず何等かの智識を遺して行かしめ、二六時中、八面玲瓏の鏡をかけ置く用心最も肝要なり。

固より讀書のみが學問の本色にあらざるとは言ふ迄もなし。左れど、讀書は是れ學問中の尤も便利なる者ゆゑ、決して之を怠る可らず。毎日多く讀まんとすれば迚も行はれがたきものゆゑ、僅か宛なりとも日に課程を定めて、少しづゝ、必らず讀み、而して能く玩味し、平生實行する所に合せて參考比較し、篤と心の底に合點するの工夫を積むべし。

凡そ讀書は、其の道をもてせざれば、反つて害たるとなきにあらず。是れ本を讀まずして、本に讀まれ、即ち書籍の奴隷となるの故による也。左れば、學校にありて、只管ら書籍を多く讀むの地位にあるものは、同時に實際に注意し、書籍の意味を活すの用心なかる可らず。之に反し、實際家政に當りて、實地の業に多く從事するものは、見識の狹きに失する恐のあるものゆゑ、書籍を多く讀むの心掛ありて初めて其の弊を救ふとを務べき也。

何れにせよ、勉學の熱心ある人は、年老ひても元氣衰へず、常に新智識を慕ふの故に、活潑なれども、此の氣象なき人は、忽ちにして老衰すると共に驚くべき也。智識を求むる人は、赤児が乳を探るが如し。常に生々したる渴望の心に充滿して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

進歩の氣力失するとなし。智識を求めざる人は、世に生存すべき天の命令を崇むらざるにや、速かに老耗して死を急ぐが如し。見よ、春天、鳩の翼を張る如く開け、木々の新らしき芽は伸んとする也、小川の氷解けて快豁に流れ、天地只管に奧義の美妙を露さんとする也、智慧を賦せられたる我等人間たるもの、何ぞ其の招きに應じ、其の福音を聞きて、學問の寶藏に入るの愉快をば取らざる。

家庭

實地家政

炭の入用、儉約の方

某女記

寒さの時分は、火鉢の底へ生灰を深さ一寸斗り入れ、跡は藁灰を入れ、よく深くほりて炭をつぎ置ときは、火のもちも長く、湯の沸もよろし。但し、斯すれば、おとしの銅が痛むと云ふ人もあれども、私は永年斯の通りにいたし、藁灰を多く火鉢へ入れましても決して銅がいたむとは有ません。その上、一と月の炭の入が餘程違ひ升。或る家にて、家内多きゆゑ、四日に堅炭が二俵づゝ入ると申し升から、藁灰をためしに用ひて御覽なさいと申し、早速翌日より、火鉢、こたつ、あんか、などに藁灰のたえぬ樣に入れてためし升たら、四日に二俵づゝ入る炭が、八日に二俵で、十分に火を使ひ升たと喜ばれ升た。まだ五月までは火鉢が入り升から、ためして御覽遊ばせ。一と月に僅かより入らぬ内でも、年分には餘程ちがひ升。

裁縫と料理

女は、裁縫と食事の事は餘程心得て置ねば成りませぬ。十四五より其心得を母たる人が能く敎へ置ねば成りませぬ。或る中等以上の家の家内が、年は三十たらずにて、未だ食事の事は少しも分りませぬ。又、裁縫も出來ませぬ故、着類は里方にて万事世話になり、又近き親類などへ頼まねばならず。食事は心安き人に日々の事を尋ね、漸くに食事の仕度が出來ます。家内は僅な暮しなれども、家の掃除、食事の仕度にて、

終日おはれて居られ升。只今は子供衆がありませぬからどうやら、こうやら、其人の世話が出來升が、子供が一人出來たら、大へん、下女に何もかもさせねば成りません。又、下女を使ふにも、食事をさせるにも、自分に知らぬと指圖が出來ません。又、差圖の入らぬものならば、主人を馬鹿にします。裁縫も同じ事にて、外に一々出されば、主人にも子供にも着せることが出來ず。いさゝかのふくろびが出來ても、下女に爲せねばならぬ故、万事、家の內、取り志まりが惡く、むだなる入用が多くかゝり、人には笑はれ、其人のねうちも下り、此の細君の兩親は如何なる人やと、世間の人から笑はれますから、學校のけいこの外、吾が家にある內に、よく女に敎へてもらはねば、嫁入してから大さう困ります。姑殿が、輕の惣菜は何にして貰ひたいと仰やり、其人は、今夕は友人二三人に夕飯をあげる約束をせし故、何にても二三品馳走致せと申されたる時など、さて何をして善きやら少しも考がつかず。姑に尋ねても、初の內は母が自からこしらへ與らるるとも、度々になれば、小言の種となり、「いつも〳〵我がせねば何一つ出來ぬ、內に居た時、何をして居りし」など、言はるれば、互に心あしくなるもの故、家にある內、母の手傳をして、日々の食事、また來客の節などは母にかはり、可成く臺所にて靜かに仕度をなし、客をもてなす稽古を仕て置ば、嫁入してのち、來客あるとも、下女に手傳をさせ、何なりとも、見計らひ、もてなすとが出來ます。

掃除の事

家の內の掃除は、成べくせねばならぬと思ひ升。第一が、ながし廻り、これが食事の仕度をなす處ゆゑ、十分に淸くするが宜しく、桶は水あかだらけ、俎板は眞黑、はうちやうはさびつき、大根も素直に切ることが出來ぬ。ふきんは、いつ洗ひしやら、志みだらけ、茶椀の中は茶しぶにてあかくなる、箸のさきは黑く、膳のすみ〳〵はごみだらけ、ながしの下は下水がつまりて水が流れぬなどは、よく注意せねばなりません。水がめは、日々中をよく洗ひ、毎朝取かへ、淸きが上にも淸くせねば、食事より惡しき病氣にかゝることが多くあり升。又、人に食事をすゝむるにも失禮に當り升。便所は、精々、不潔にならぬやう、日々掃除するが宜ろし。不潔の場所ゆゑ、少

し怠たると掃除なすにも、たいぎになり升から、毎日、そうとをすると、造作なく美しくなり、一寸、人さんが便所へ参られても見苦しからず。また草履もはな緒のきれぬ注意せねばなりません。

子供と金錢

鷗村

其家の教育の風で、子供等がお父さん五厘お呉れのお母さん一錢お呉れのといひ、父母はまた子供に錢を與へて、自ら菓子または、おもちやを購はしむる所がある。如斯きは、たゞに下等社會のみでなく、中流の社會にも見受けらるゝが、あまり風儀宜しからぬ事と思ふ。子供は大樣に、無邪氣に育て上ぐべきものゆゑ、それには昔の士人の子弟の教育の風を保存して、幼少より自ら金錢を使用せしめないがよし。子供をして早くより金錢を使用せしむるに於ては、其重寶さ、難有さに、之をこよなきものと思ひ出し、果ては金錢に役せらるゝ賤しき根性を養成するとゝはなるまじき歟。金錢は役すべし、金錢に役せらるゝべからず。

昔の士は、金錢をいやしきものと定めて、手にも觸れで箸で挾いたといふとを話して聞かしても、今の子供は中々本當に受くるものでなし。さる士人の子や孫が、世が變はれば變はるもの、大きくなつたら、エライ金儲けをするなどゝ廣言し、學校の教育がまた金錢の難有味、金錢の勘定、金錢の儲方を教へる。先日もさる家の子供が、なんといふ文字をお清書して居るかと思つたら、『近頃舶來品拂底に付二割方騰貴致し候』と書いてゐたが、譬へば、今の子供は、全躰おしなべて、商賣往來の稽古をしてゐるやうなもので、まだそれのみか、學校で生徒に貯金の事などを奬勵して居る。成程昔封建政治の世とは違ひ、誰彼の區別なく、共に生存競爭の世に處してゐるからには、金錢の使用、金儲の算段などは、早くより子供に教へるの必用があるかもしれぬ。しかし今日の學校教育の風は、あまりに金錢を崇拜せしむるに過ぎて、金錢なるものゝ性質を誤り信ぜしむるとの弊害に陷りてはをらずや。それも左樣あるべき筈、金錢の爲に使はれてゐる教師達の多い學校にて教へらるゝとなれば。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

買ふべきものあらば、父母は自ら子供の爲めに買い與ふべし。子供自らに購はしめざれ、子供の爲めに貯金せんとならば、父母は竊に自ら彼等の爲に貯金すべし。子供自らに貯金などせしめざれ。要するに、家庭に於ては、子供に、成べく金錢を輕く見て、之に役せられざりし、武士の教育の風を保存すべし、今日の學校が此點に缺けて、反對の方向に弊害を生じつゝあるなれば、特に家庭は殊に注意すべきことに非ずや。

子供をして夙に金錢の價を知らしむるやうの教育法は、一は世の中の狀態の昔と違ッたからでもあるが、主としては、外國殊に米國風の教育法を、委細かまはず、其儘に輸入したからである。尤も米國の子供は、聞く所によれば、幼少の時分から、自分の金といふものを父母から貰つて、クリスマスなどには、其金で贈物を買つて、友達にやつたり、また其金を教會に納めたり、慈善の爲に捧げたり、或はまた物品などを破損したる其償金として、父母に徴收さるゝこともある。中には小賢しき子供等の幾人かゞ、同盟醵金して一種の小さき合資會社を起して、土地などを買ひ入れて、金儲けをすることもありとか。米國では毎年々々諸外國から何十万人となく移住するものがあるから、昨日まで野原であつた場處が、今日は人家櫛比する有樣であるで、其處で彼子供の合資會社は、初め安く野原の片隅などを幾千坪か購ひ入れて、榜杭打つたまゝで、手もいれず、草が芒々と繁つた儘で打やつて何年も打やつて置くと、其中に其處らあたりが、賑しき市街となつて、彼草芒々たる子供合資會社の所有地も、エライ價値を生ずるやうの次第となつてから之を賣拂ひ、所得を分配するとの事なり。

六

白痴者でも代議會を開くといふ米國の事故、子供でもなか〳〵金儲には抜目がない。米國の子供は如斯く幼少より、金錢を使用することを知つてゐる。去るに彼等は一方には金錢の難有味を知つて居ると共に、他方には亦慈善公益の爲めに、惜むことなしに之を差し出すことをも知つてをるが故に、彼等は金錢に役せられぬ習慣を得て、これがまた、彼國の美風をなせる次第なり。其美風の存してゐる方は見ずに、金錢を重んじ、金錢を蓄へる方計りを見て、之を輸入して、社會の風習をかへ、子供を教育する有樣故、我國の社會の狀態は、歎くべき貪利々己の主義に馳することゝなりたり。世の中が此狀態になつたを嘆ずる人の癖として、外國の風に感染した御蔭さまでから

だといふが、それは甚だ無理な譯で、全くは外國風の片面ばかり持ち込んだ、我國人の御蔭で、かくなつたるなり。もし金錢を重んずると、米國人の如くにありたいとならば、一方にはまた其國人の如くに、之を重んずるが故によく之を他に與ふの美風をも採用すべし。しかし我國の美俗として、金錢の事をあまり口の尖に出さず、一諾は千金より重くし、金錢の爲めに節を變ぜない、祖先傳來の廉潔の德を飽までも保存したし。この美風が段々と廢れたが爲めに、忠臣私を好み、法官法を曲げ、武人財を愛むの歎はしき弊害がいよ〳〵増長する次第となれり。冀くは金錢に使役せられざりし、昔の廉潔の士風を、我國の子弟の教育の上に保存して、學校殊に家庭にて此風を鼓吹したきものである。それには幼少より子供に金錢を使用せしめざることそよけれ、少くとも十歳以上の齡に達するまでは、子供の手に金錢を預くるとなきがよし。

○子供のほしがるもの

子供は見るものが欲しく、珍しきものが欲し。さる欲望を一

々遂げしむるは、何でも我欲するまゝになり、思ふまゝになると思ふ精神を増長して、年長じてから自分で困しみ、また我儘に育てた子は、兎角手癖が悪くなつたりするものであるから、其邊の處よく〳〵注意すべきものである。然るにまたあまり欲望を制し過ぐれば、コセコセとした、大様でない性質を小兒に與ふるものであれば、要は、よき切り盛をつけて、小兒の欲望を滿足せしむることそよけれ。小兒は必ずしも價の高きものが欲しきでなく、また必ずしも新しいがよいでもなく、珍らしいものが一番氣に入る。そしてまた極て飽易きもので、何でも直に打ちやつて仕舞ふ。それ故打やつたものは、よく破損した處は取り繕ひなどして保存し置き、子供が再び欲しがる時に出してやれば、舊いものでも構はず、また珍しがつて喜ぶと請合なり。凡て小兒の欲望は一概に之を制すべからず。「やかましい、あれが欲しい、これを買つてといふものぢやないぞ」と叱り飛ばすべからず。父母は子供の欲望を滿し與ふべきの責任あるものなり。あれが欲しいけれど、さういつたら御母さんか御父さんかに叱られるといかんからといふ精神の、子供の念中に生ずるやうになりては、其子供は實

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に哀れなるものにてはなきや。子供の欲望を滿たすが爲めに、果して何程の金錢をか要する。

○おもちやの仕末

前に一寸いひしとほり、子供は、おもちやなどを、少しの程、珍しがつてゐるかと思ふと、間もなく打遣つて仕舞ふものだが、また後に再び思ひ出してそれが欲しくなるもの故、父母は其打遣つたものを、よく保存して置くべきとあるがまた、子供自身にも保存するといふ習慣を得せしめなければならぬ。またおもちや箱をさらけ出して遊んでゐるが、それも飽と、何もかも打ち散らした儘に仕末といふとをせず、親兄弟僕婢が後仕舞に困ることが通例であるが、全躰よく〳〵いひきかせて、自分の出したものは、自分で仕舞ふといふ事にして、物事を整理する習慣を與へなければならぬ。おもちやを打ち散して捨てゝ置くと其習ひとなれば、長じては、亂雜づろう、放埒の性質の元因となること尠からぬなり。

女子手藝の案内（三）

刺繡用器械の事

美よし野

刺繡に用ふる器械は、其數餘り多からず、刺繡臺を始とし其他は、刺繡針及糸綯り器械等にして之に下繪を寫す道具即ち毛筆、木炭、白粉、胡粉、なぞを加へなば、先づ大方は事足るなり。

○刺繡臺

四脚ある長方形の木製の臺なり、此長方形の方形の長棍と短棍とにて組み立てしものにて、長棍の長さ大抵三尺許、短棍は一尺四五寸、脚の長さ一尺二三寸にして、其大さ通常書見に用ひ玉ふ札と、同じと思さば大差なかるべし、又相對せる二長棍の内側面には、寸毎に斜に小孔を穿ち、繡べき布帛を掛るに供ふ。其他長短細大少く異りたる二本の棍あり、稍細して、稍短きものを、二長棍の左端、短棍の内部に固定し、稍太くして、稍長き方の圓棍は長棍の右端に穿ちたる圓孔に貫き、自由に轉廻し得るやうに造りたるものなり。略圖に於て見玉ふ所の如し。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

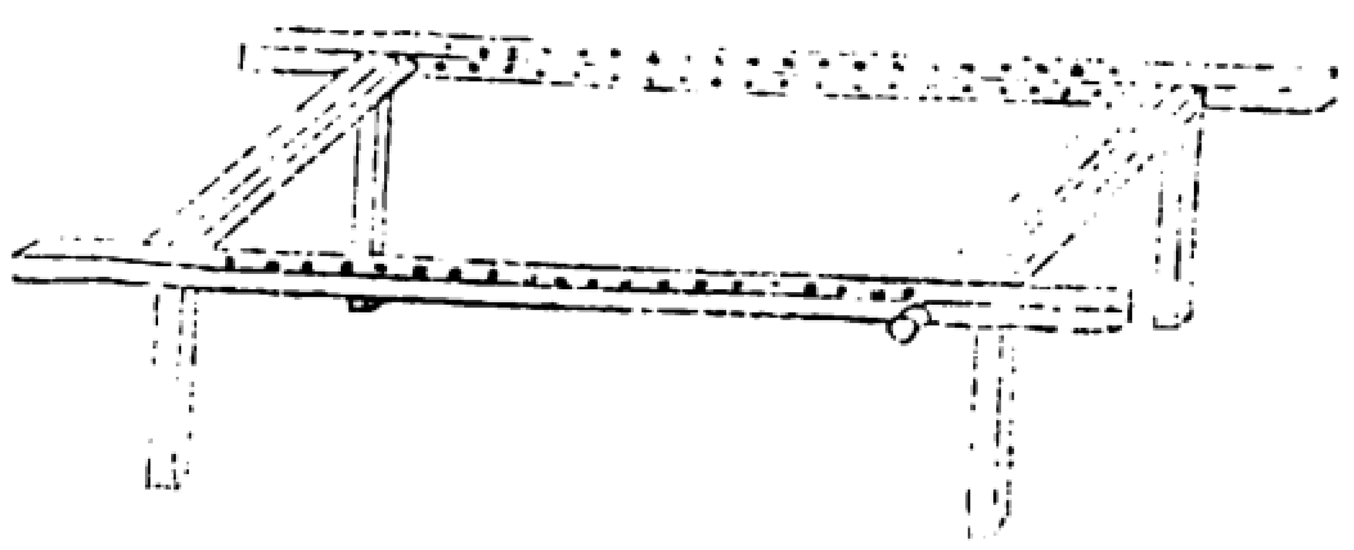
○針の種類

刺繍に用ふる針は種々あれども、大抵四五種を供へ置きなば、大方の繍ひを爲すに差支へなきものなり。中に就きて最も太きを松縫と云ふ。此針は主に木綿糸ぬひを爲すとき用ふるものなり。次は平糸針卽ち釜糸針にして、平糸ぬひに用ふるものなり。此針に二種あり、常太、常細、と云ふ。其次をぞべ針と云ふ、さしぬひ、すがぬひ等に用ひいと細き部とす。是れも亦二種ありて、糸八、細八などと稱ふ。其他針に糸を貫して、刺繍する爲め用ふるにはあらねも、縫ひするとき、糸の亂れを防ぎ、糸を送るに便ならしむる爲め、用ふる針あり、目打と云ふ。太さ錐に等しく一端鋭く尖り、一端は方形或は薙刀形を爲す。其長さ三寸許にして、糸縒るときにも、糸を引き掛くるにも用ふるなり。

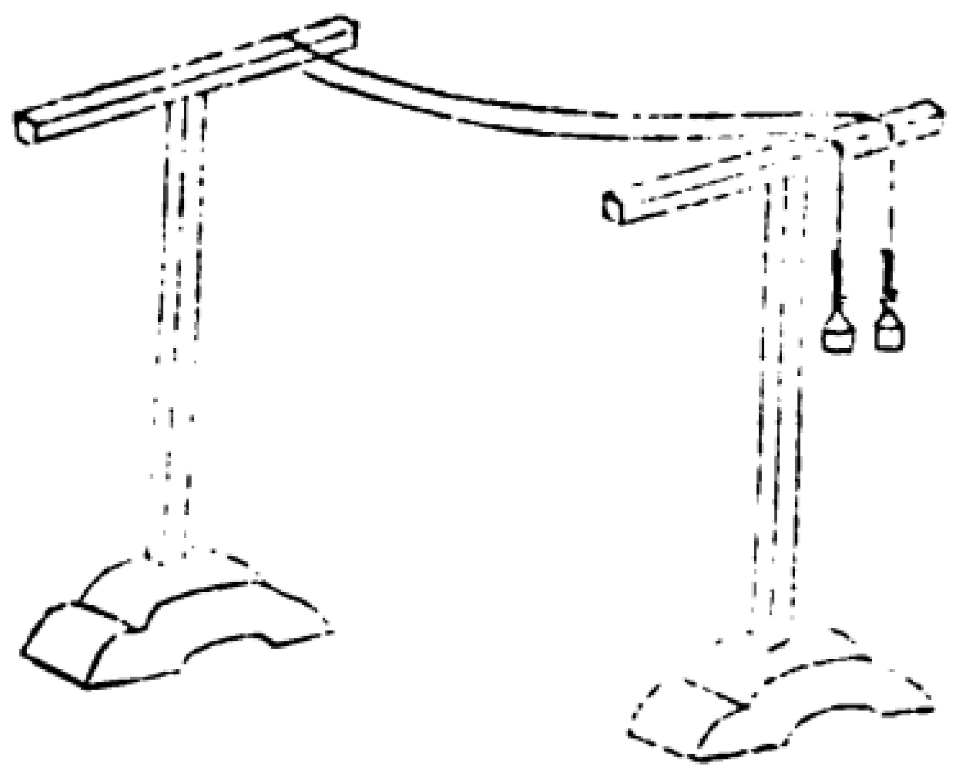
○こまと臺

長さ二三尺位の糸を縒るには、刺繍臺の長棍に穿ちたる小孔に目打を樹て、之に糸を掛け、縒りて用ふるもことたるべしと雖も多分の糸を縒るには、他の法によらざるを得ず、卽ち圖の如く、高さ四尺餘の丁字形の木製の臺一對を作り、二

刺繍臺



こまと臺



三間乃至四五間を隔て〻二基を對立せしめ、一基に糸をひきかけ、更に其糸を延べて、他の臺に懸垂し、其緒と緒とに各こまを結びつけ、雙手のひらにてこまを緩轉しよりをかくるなり。こまは圖に示すが如く。其狀玉兎に細き竹竿を樹てしが如きものにて、緻密なる質の木にて造りしものなり。

○臺かけの事

臺かけとは刺繍せまく欲する切れ地を、臺にかくる事を云ふなり。これを爲すには、先づ切れ地の一端に、丈夫なる綿布を縫ひつけ之を輪と爲し、刺繍臺の左方に固定せる圓棍に透し、又切れ地の他端にも、前者よりは長き綿布を縫ひつけ、之を右方の圓棍に卷きつけ、棍の逆に轉を止むる爲めに、竹製の楔をかい、以て切れ地のたるまぬやうに爲すべし。斯く左右に引き張りて卷きたる後、太き木綿糸を、長き方棍に穿ちし孔に貫し、切れ地をよくかゝりつけ、臺かけを終るなり。

○臺かけに付きての注意

色薄く褪せ易き刺繍品は、刺繍すべき、一局部のみ出し、他は悉く紙或は綿布にて覆ひ置くべし。又地質粗惡にして、繍糸の止まらぬものは、紙或は布片にて裏打ちを爲し玉へ、然らざれば細密なる繍ひは爲すこと能はじ、特に縮緬類は臺掛けの仕方拙きときは、おぼ延びて見惡く全く別物の如くなり下るなり。故に縮緬を掛くるときは、丈けを引き張るは、苦しからざれど、巾を引き延ばすべからず、斯せざれば、しぼ展びて平になり品下るなり。

○下繪の轉寫法

下繪を轉寫する法、二ッ三ッあり。其中にて刺繍せんと思ふ布帛の地質、薄くして紙の如く透し得るものなれば、下繪を針にて切れ地の裏面に止め置き、通常の繪畫を寫す如く、布面に寫し採なり。又琥珀、繻子、緞子の如く地質厚して、此法にて轉寫すると能はぬものは、下繪を裏面より白粉にて繪取り、之を切れ地の上に壓迫して、朧に其狀を寫し、更に其上を白粉にて上寫し、明かに爲なり。下繪を轉寫するには、白粉を最良と爲ども、或は胡粉、墨、木炭、なぞを用る事あり。又形紙と云ものあり、厚き澁紙に種々の繪畫を打ち拔き、或は切り拔て顕はせし陰畫なり。之にて下繪を轉寫するはいと易し、只形紙の上を白粉或は木炭にて磨擦すればよきなり。故に同一の模様を數度轉寫するにはいつも此法によるを宜しとす。

○刺繡臺改造の意見

前章に掲げし刺繡臺の造り方は、是れまで普く、用ひ來れる者の構造法なり。されど此臺は其位置平かなれば、光線を受くる量少くして、刺繡する者の眼によろしからず。彼の刺繡師に近眼者多きは、主に其臺の作り方不完全なるに、基くならむと思はる、近き頃より、斯道も日に月に進み行き、此術を脩むる者次第に多くなりもて行に從ひ、此害もいや増に増し行ものなり。斯く思ひ起しなば、此臺の改造は一日も忽に見過し難し。よりて先づ隗より始めんとなん云ふ意にて、簡單なる改造法を陳べんに、四脚中先方の二脚を四五寸長くして、切れ地の面を斜に爲し、二本の長棍の內側に溝を穿ち、切れ地を掛る圓棍を偏方形に改め作り、之を短く縮めて、兩長棍の內溝に適合する如く爲し。溝內を自由に動かし玉ふべし。又此二棍を止めるには、螺線形の木栓を以てし、切れ地の大さに應じ、隨意の所に於てすべし。永き時間端座するは、胸廓を壓し、衞生上宜しからずと思はゞ、此四脚を延して卓の如くし、椅子に憑りて繡せられよ、鑄鐵も鑠すてふ夏の日などには、特に此の方勝る心地するなり。(つゞく)

火鉢煙草盆の事

火鉢煙草盆は平日よく掃除をすることを下女に敎へねばなりません。いか程結構なる道具にても平日粗末に扱ふと、アカだらけにて、地躰の善き艶を失なひ田舍の茶店の道具の樣になり、折角のよき道具も何やら分らぬ樣になり升から、平日によく注意して成べく大切にカラぶきをなし置時は、來客の節俄かに掃除をせずとも何時にても差支へありません。又灰吹も日々掃除を爲し置ときは見苦しからず、平日心掛のなき家は、火入の中の灰はごみだらけ、其中へ火を入れ升から火入の火は忽ち消え、灰吹の中はすひがらにて一ぱい、實に見苦しきものです。然し見苦しき計りでなく、客人に對し大失敬になり升から、火入の灰は平日美しくよくならし、灰ふきは能く洗ひ、中を指の屆くだけ雜巾にてふき、水を少し入れ置けば、來客の節差支へがありません。火鉢も同樣、よく灰をこし、客火鉢ならば平日に佐倉炭の中位の所を三つ許り入れ置時は、すぐに火をよく入れて出せます。平日心掛のなき家は、寒き時、客を座敷へ通し久しく待たせ、やう〳〵火鉢を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

運び出せば、中の灰が固まり居るゆゑ、暫時にして火は消え、客人に氣の毒の思を主人がせねばなりませぬ。火鉢の灰はすくなからぬ様、又多くあるも宜しからず、よく注意せねばなりません。夫も下女計りに任せては、物事麁末になり升から、自から手を下し、よく下女に敎へねばなりません。

良人への介抱の事

良人は家にあるとは少なく、外の勤が多くあり升から、衣類足袋靴下は着物ハンケチ等を見苦しからぬ様に注意せねばなりません、糸織お召などの結構なる衣類もあかじみ、羽織はシワだらけ、足袋は鼠色、ハンケチはしみだらけ、洋服はゴミ、靴下は汚れ、指先が破れ、まことに見苦し。いつ何れへ參れても差支なきやう出入の節よく心かけねばなりません。靴、下駄等も下女下男に平日よく申付け不都合なき様にせねばなりません。家族が多くて手が廻らぬ、子供が多くて手が屆かぬとよく人の言ふとであり升が、少し注意を仕ますと自から手を出さずとも出來ます。然し家族多く、子供多を申し立て、人手をあてにするは惡しく、全く出來ぬ時には人にさせるも差支はありませんが、成べく良人の事は人手にかけぬ樣、其妻たるものがせねば成ませぬ。

良人の歸りし時

良人が疲れて宅に歸られし時には心地よく出で迎ふるは、大切の慰さめです。吾家に歸り、ヤレ〳〵と思ふ入口にて心ちよくされゝば、疲は過半消えて仕舞ひ升。僅かの事ながら、此の心得なき時は、いよ〳〵良人の心を重くし升。家によく待ち居る妻は自然に此の情合は出でべき筈です。

まゝ母の手鍋にはかけじ

酒三不埒(戀川春町)に後添を迎へよと勸むるものありしに、よめる歌

おもひ子はにえこぢるともまゝ母の
手鍋にかけずたき守たてん。

手柄腦持と云ふ人の返しに

みどり子はてしほにかけてもり立よ
かう〳〵ならばさいはなしとも。

文藝

琴の話

蟲湍子

（高野繁氏を訪ふ）

一概に琴といへども、琴にも幾多の種類ありて、其別を擧ぐれば、和琴、琴、箜篌、新羅琴、箏、八雲琴、須磨琴、等なるべし。而して今日世上一般に弄ぶ十三絃の琴は、其實は箏といふが正しきなり。然れども其最も廣く用ゐらるゝより して、通常琴といへば、箏の事になりたるは、恰も上手の裁判は、大岡越前守に限り、太閤は秀吉に限りたるやう思はるるが如し。

○和琴　一名東琴

和琴一名東琴は、先づ〳〵我國固有の樂器と見るべくして、既に神代の遠き昔より存在せしとの事なり。彼天照大神が天の石屋戸に隱れませし時、天香弓六張を並べて、其絃を彈ぜし時、鵄飛び來りて、弓弭に止まりしとかいふが、抑もこの和琴の起原のよしにて、和琴は即ち六弦、琴首は鵄の尾の形をなせれば、一名を鵄尾琴ともいふとぞ。桐を以て製し、形箏に似て短小なり。此倭琴中昔までは世に弘く弄ばれし事、彼大江匡房が少年の時、官女の戯れに答へて、

逢坂の關のあなたもまだ見ねば
　東のことは志られざりけり

と詠みたりしにても知らるべくや。後には重に神事に用ゐらるゝやうになりしとぞ。また上代には夫婦の結びをなす時、必ず女の親の方より聟に琴を與へて、其をば永く夫婦の中の契とし、緣を絕つ時は、その琴を婦の方に返し渡せしこともありしならんと考ふる人あり。今は和琴、之を見るも稀なり。

○琴

神農創めて之を造り、本は五絃なりしも、周文王之に二絃を加へて七絃となしたりとぞ。古へより我邦に傳はりて、殿上人の間に弄ばれしといふ。琴の大きさ、丈三尺六七寸なり。此琴の樂今は我邦に絕えて、聞くべうもなし、此琴の爲めに作られたる樂曲は、今は箏曲の中に殘れりといふ。

○箜篌　くだらごと　新羅琴

此二種一度びは我邦にも輸入せられしかなれど、今は殆ど其

影だにもとゞめず。

○八雲琴　須磨琴

八雲琴といふは即ち二絃琴にして、焼桐を竹の様に削りなし、長三尺餘幅四寸ばかりあり、二絃の糸を一掻に彈ずるもの、元は、出雲大社にて八雲たつ出雲八重垣の歌を彈奏する爲めの樂器なりしといふ。八雲琴の名あるは蓋し是が爲なるか。

須磨琴は一絃琴にして、昔在原行平朝臣、須磨の浦邊に、配所の日數送られける間、徒然慰めんとて、海邊に卒都婆の流れ寄りしを拾ひ上げ、之に冠の緒一筋を張り、蘆の根を切り持ちて奏でしこそ、此琴の由來なれとは言ひ傳ふなり。

○箏　一名筑紫箏

前にもいへるが如くに、今人琴を彈ずといへば、いづれも皆十三絃の此箏を弄ぶにて、此樂器は即ち琴なるものを代表して樂器界に雄出す。箏の寸法は長さ六尺四寸、首は廣さ八寸二分半、尾は廣さ七寸八分八厘、絃十三、柱高三寸を正式とし、桐を以て造り、上は高く、下は平らに、中は空なり。支那より舶來せる樂器にて、もと人皇第五十五代仁明天皇御宇に遣唐使藤原貞敏なるもの之を本邦に傳へたりといひ、既に平安朝時代に在りて、管絃樂の一部となり居りしなり。此箏に筑紫琴の一名あるは、傳説に五六百年以前公家の人某筑紫に流され、配所のつれ〲に雅樂の箏の手を彈きかへ越天樂の歌をのべて、調を長うし、箏に合せて彈きしを、筑後國善導寺の僧、之を習ひ傳へて、世に弘めしが故といふ。此説の眞僞さだかならねど、兎に角に此箏久しき昔より筑紫に傳はり居り、雅樂の俗耳に遠きものより移りて、其國ぶりに染み、筑紫樂なるもの起りしならん。またいふ肥前の人賢順なるもの御奈良院の御時(今を去る三百五六十年前)に在りて、筑後善導寺の僧に箏術を受け、之を我同國慶岩寺の僧玄恕なるものに傳へたりといふ。玄恕また之を八橋撿校に傳ふ。八橋撿校は實に箏樂の大成と今日の流行とある功を歸すべき八橋流の鼻祖なり。

○箏曲家の流派

八橋撿校は、元來非凡の天才なりしと見え、筑紫樂の高雅にして俗耳に遠きを以て、自ら新に十三曲を制し、後また三味線の組に習ひて新曲二組を補ひて、八橋一流となりたり。撿校は貞享二年に身まかりし人なりといへば、箏の俗間に流行

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

し出したる其初めは、今を去る二百二三十年以前に在りと知らる。

八橋檢校の門弟に生田某あり、生田流の開祖たり、生田流より出でゝ新生田流を名のるものは、今日我邦に最も廣く行はるゝ處のものといふ。山田流、中川流、安村流など皆新生田より分れしものにして、各一派の旗幟を樹てゝ、同黨伐異を事とすと雖も、各流派間の曲調手つけなんどの差異如何程かと尋ぬれば、極めて些少のものにして、甚しきに至りては僅に爪の形の異なれることあるのみに過ぎずといふ。

新生田より出でたる多くの流派の中、山田流の一派は、一百五十餘年以來今日もなほ、東京市内の箏曲の全權を掌握せり。

山田檢校なるものゝ、業を新生田の門に受け、志成りて、江戸に歸りしや、當時なほ江戸に於ては、箏曲は俗耳に遠しとして、未だ流行せず。爰に於て、山田檢校は、八橋檢校以下の樂家が、俗耳に近きを求めて、製したる箏曲をして、更に江戸の人情に合すべき鄙俗のものとなし、清元の文句、調子を採用して、先づ自ら之を芝居の陰ひきに試みたり。其時まで芝居のカゲに箏を用ゐて、三味線に合することなどは、

絶えてあらざりしに、今山田檢校の新曲新案を行ふに際して、大に人氣を取り、遂に山田檢校の名江戸に喧傳して、江戸の箏曲は、山田流一派の配下に歸したり。山田流なるものは、實に箏曲をして頗る鄙俗ならしめたるものにして、其流を汲むものは、いよ〳〵鄙野に陷り、維新以前頃には、箏を以て、艶物心中物の鄙猥の音を彈ずるの甚しきをなせり。

箏の樂は、高雅優美なるを以て稱せらるゝものなり。實にや昔はこれ管絃の雅樂に備はりて、朝廷の式樂を奏せしものたり。然るに、其下りて筑紫樂となり、八橋流となり、山田流となるの間、常に時世の俗情に合せんことを求めて、漸次鄙野淫靡の音をなすに至りたり。初めには長唄などを奏するを忌みしものが、後には心中物を奏するに至り、曾て嫌ひし三味線にも合奏することゝさへなれりき。而して其鄙野なることと山田流の末派に至りて、極まれるものといふべし。然れども今日に至りては、東京市内に山田流の名手を以て稱せらる程の人は、各其流派の曲調の卑俗に陷りたるを嘆じて、漸々之を棄てゝ、他流の曲調を採用し、名は山田流を冒せども、實は之を離るゝこと遠きものありといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

華族女學校箏曲教師高野繁氏は、國風音樂の改良に熱心なる人にして、國風音樂會を東京に起して、なほまた地方の同志を糾合して、從來の箏曲、三味線、笛、尺八等の歌謠音曲に改良を加へ、新曲新詞を編み出して、日本音樂の基礎を固め、それより及ぼして、オルガン、ピアノ等の西洋樂に至るまで、皆之を化して日本音樂たらしめんとするの意氣あり。且つ箏樂をして其古への高雅優美なるに復歸せしめて、之を朝廷の式樂に用ゐるに至らしめんことを志せり。氏はまた茲に女子の體操の不完全なるを憂へて、自ら工夫に工夫を積みて、新に舞の手振りを寫して、何人にも習ひ易き、一種の女子體操を案出せしが、今現に之を華族女學校に於て教授せり。氏は兩眼共に明を失へるの人にして、此事あるに至る頗る多とすべきなり。

予一日高野氏の門を叩いて、氏が國風音樂改良の意見を聞き、また箏曲の道に關して、聊か質す處あり。前に述べたる箏曲「歷史の近世に渉るものは、氏の說話に得たること多し。今また左に斯道に關して、氏が談話したる節々の二三を略記せん』

氏の門人を敎ふるや、同時に二三の樂器を敎ふることなし。假令は琴を習ふものゝ、其技に於て相應の熟達を得ざる迄は、決して三味線または尺八等に觸れしめず、それ一藝に於て、よく會得したる處あれば、他の技に移りても、其進步坦々として、容易なり。然るにどれも此も生ら半熟にして、彼よ此よと習ふものは、遂に其孰れにも達すること能はず。

嘗て書家某氏なるもの、氏が其門人を敎ふるの坐に在りしが、氏が敎授法を傍聽し、後に氏に告げて曰く、予の書を敎ふるの法、君が箏を敎ふるの法と、毫も異なる處なしと。

琴を彈ずるに當りて、體のこなし、手の動かし方等、不自然なる時は、音整はず、調亂る。假令ば軀を歪りたり、指の節々を固くして居たりなどすることは、盲目なれど、琴の音に表はるゝ處を聞きて、知らる。それのみか、鼻の上に皺を寄せたり、舌を出したりすることまでも、明に知らるゝなり。されば音によりて、彈者の善人惡人を知り、喜怒哀樂の情を察し得らるべき筈なり。然れども之を聞き分くるには、非凡の耳を要するなり。阿古屋の琴責に、重忠いふ樣、糸竹の調は五音四聲に能く通じ、直きを以て調となす、曲り僞る心を以て、此曲をなせる時は、其音色亂れ狂ふ。就中此琴、音あ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

るもの、司として、人の心を正しうし、邪を禁むると白虎通にも賞じ置きたり。こゝをもて重忠が、女の心を引き見る拷問、十三絃筋に縛り絡めて、琴柱にくじめ、科の品々一より十まで、手爲ぎんずるを曲事とは申されまじと。實にや重忠が捌き振りは尤も至極の事にて、微妙なる音樂の耳を有せんものならば、音の發するによりて、人の善惡正邪を判つことを得ん。

箏を彈き習ふに如何に下根の者なればとて、其人に氣根ありて、また之を敎ふる者よからんには、之が爲に、特に懇篤熱心の訓導を與ふること十五日なれば、彼下根のものも、俄に目覺しき進境を表し來らん。されば又、如何に上根のもの、黽勉の者なりとても、師匠たるもの、よく其器に非ずんば、幾年の工夫を費やすも、遂に道の奧に達すること能はず、あたら名器を土芥に埋むる次第とならん。撰ふべきは師にこそあれ。

箏面に對して、絃を調ぶるに、歌詞曲調の變化譬ば木の葉の落ち、水の流れ、泣き、喜び、悲しみ、笑ふなどの場處に、彈手が現に是等に對する心持にならず、同情を寄せず、たゞ

無心に、コロリンシャンと掻き鳴らす丈にては、音聲調子に生命なく、働きなし。

和歌

池袋清風

折にふれて

世の中の春におくれぬ少女子がまなびの窓に梅が香ぞする

早春水

我やどの池の氷もとけそめてけぶる蘆間に朝日さすなり

早春霞

春の色をほのかに見せて足引の遠山まゆにひくかすみかな

山家鶯

みやびをのとはぬもをしき山里は花に柳にうぐひすのなく

春旅

小車のつまづくたびにさむれども春の旅路のねぶりがちなる

霞中歸雁

おぼろにも野川の水に影見えてかすめる空を歸るかりがね

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

春夜興

梅の花かつちる里のおぼろ夜にひとふしならぬ笛の音ぞする

閑中春雨

墨すりて友まちをれば春さめにおちとめにけりのきの玉水

花圃の若草

水邊花　郁子

すみ田川きしの櫻にうかれつゝこぎ行く舟もおもしろきかな

曉鶯

あかつきの空にこゑをや學ぶらんふしもまだしく鶯のなく

英子

降つもる雪は消えねど春たてば花をたのしくまちわたるかな

文机の友とこそみれうめの花今を盛に咲きにほひつゝ

岩上鶴　つや子

動きなき岩ほはなれずなくたつは君が八千代を祝ふなるらん

月夜梅　晴子

いにしへの人もおもほゆ春の夜のおぼろ月夜に梅をかざして

梅の花にほひをこめて大空の月もおぼろにかすむころかな

隨感

○維新以來三十年

維新以來三十年、新規の計畫夥しきとなりしが、實際の進歩は何事なりしぞと深く思ひ運らし見よ。取とめて是れ即ち夫れなりと言ひ得るもの何處にありや。中に就きて稍や面目を施こすべきは、農工實業の事、又は醫藥理科に關するとのみ。其他、政治と云ひ、法律經濟と云ひ、敎育宗敎と云ふ如きの類、抑も何ほどの實効を擧げ得たりし乎。試みに、立憲政躰など云ふもの〻始末を看よ。當年の慷慨と現時の失望と、双ながら同もに兒戯の沙汰にはあらずや。むかし家康不世出の伎倆を以てして尚ほ一代に成し得たる所、極めて尠し。三代相續の英傑に至りて初めて形ばかり新政躰を成就したることを念へば、明治一新の政府尚ほ三十年の壽命に過ぎずと觀じて、暫らく幼稚の命運に甘んぜざる可らざる乎。正に是れ國士當年の氣慨の失せたると、先輩に代りて遺志を相

續すべき英才の尠きとに由るのみ。抑も吾等誰をか責めん、各自當に躬から反省すべきのみ。

○女學の爲に殷鑑あり

女性の敎育開發と云ふとに疑ひのあらん筈はなけれど、其の方法に至つては仔細に研究せざる可らず。左なくんば敎育せざるの寧ろ優れるに及かざるとあらん。吾人既に男性敎育の始末に鑑みたり、再たび其の謬誤を襲ぎて失策の二の舞を爲す可らず。詮なき新趣構をのみ立てゝ、暫らくして自から其建築を打破せざる可らざるの愚を演ずまじとは念ず。人生、痴見を去る何の時ぞ。幾度か吾が智覺の中に死肉あるとを歎かざるもの何處にかある。

○天の使那邊にある

ことし年頭に際して切りに感ずらく、本年はこれ政治禪の大いに要めらるべき機會なりと。今にして彌よ其の實跡を觀る。遙かに察するに、諸々の國士大抵氣力を屈し、年末の期望を失なつて、亦た理想の存するものなし。中心既に慨する所な

く、念頭特殊の經驗を立てず。只だ汎々として生息し、茫洋として歩みを進む。前程の光景雲漠々として脚下の土臺砂子の如く土泥の如し。自から省りみて堅固ならず、腹中空虚を感じて精神の萎微せざるを希ふも得んや。四面楚歌を飲みて、騅征かず馬行かずと歎ちつゝある人尠からじ。左るにても、大説法の人の起る晩き哉。天下煩悶の人何處に行きてか平安の福音を聞かん。野は色づき、魂は叫べり、天の使は今那邊に慈眼を垂れつゝある。

○機勢既に轉じたり

先輩何となく氣力を失し、後進何となく智慧あり氣にて、馬車に乘る人の顏青ざめ、車ひきなどに强相の人增加し來らば、新しき機勢大に熟し、革命一轉の時日既に近づきたりと知れ。凡そ勢に後るゝものは、爲す所常に敗れ、勢に先だつものは、爲す所常に難み、勢に乘ずる所の人は、頗ぶる元氣よげに見ゆ。今左したる思慮あり才覺あるにもあらぬ後進の士が先輩を見て、其の馬鹿らしさ加減の見え透く樣になり來りしこそ、時勢既に大に轉じたる證徴なれ。後進の賢にあらず。先

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

廢の後れしのみ。代謝は一時の榮辱を來せど、國運の進歩に已むことを得ず。但だ能く之を考ふる者こそ學びたりと言ふべけれ。

○韜晦先生

老親に仕へて其の怡びを悅び、妻子と和樂して風波を過し、會心三四の友と往來して少しは時勢をも風流をも談じ、天下の事大抵は異變なきものぞと觀じて、深く韜晦する隱士の生涯こそ羨ましけれ。然に閑日月あり、春風徐に通ふ。悠洋として靜かに語れば、香氣後庭の菜圃より薰じ、鷄子睦ましげに群れ遊んで、人間の爭闘を知らず。兩ながら沒れて、太陽温かに照す。誰か這般の境涯を味はずして偏に世に忙殺せらるゝの愚を擇ばんとはするぞ。

○大美は大醜の如し

櫻痴居士が今の學者を評して、宗教心なし、美術心なし、歴史心なしと言ひしは當れる哉。わけても欠乏せるは初の二つならんと思はるゝが、人にありたきものは、反つて此の二つなることそ殘念なれ。宗教心なき人は、規模小にして徹底せず、之と交はりても面白味なし。眼前の小義に激して兎角に逆らひ、濶大自若たる誼を結ばんやうなし。美術心なきは、現金主義にて、忽ち利害の勘定せらるゝ心地し、互ひに微笑默契するなどの消息を通ぜんやうなし。然し乍ら、宗教に凝り、又は美術を氣取る人々も亦たうるさし。忽ち異信仰をもて責め、忽ち俗物呼はりをするは、此人々の長所なり。凡そ大信ある人は大疑の如し、大美ある人は大俗の如し。惣じて、味噌くさき味噌は、好き味噌にあらずとも、語り傳ふるものを。

○奇跡及妖怪

奇跡を無みし、妖怪をあらずとするは、如何にも面白味なきことと思はる。もし大觀すれば、惣て是れ妖怪の如く惣て是れ奇跡の如し、故に亦更めて妖怪あり奇跡ありとも言ふには足らざることなれど、談話するは通常の語法に由ることゆゑ、一々哲理と禪味とをもて論ずるは亦た究屈の事ならずや。既に通常の語法をもて吾人の常識を言はゞ、吾人は奇跡あるを常と

し、妖怪あるを當然とし、反って之に詩的趣味と宗教信とを託して大に珍重するもの也。今の理學をもて一々解き去り、天地人生の秘義をさらけ出して亦不可思議なしと言ひ去らんずるは、其の見識の子供らしく横着なると同もに亦阿呆らしき勉强にはあらずや。森々たる幽邃の鬼氣は人間の爲の一滋養品たり、何ぞ之を文明敎育の敵とは言ふ。吾人は殺風景なる理學の侵入を許さず、神秘にして奥ゆかしき好尚を多しとして、長く幽靈と、奇跡とを保存せんと欲するもの也。

○慈愛の救ひの御手

中夜人寢ねて見るものなし、但だあり、古への聖賢の机上の青史より明鑑せらるゝのみ。襟を直くして謹しみて思惟す、吾が赤心の薄弱なる、氣力の不足なる、慈悲の淺小なる、何んぞ夫れ斯の如きぞ。慚愧、心底より勃起し來りて、雲の山より出でゝ叢るが如し。胸火熱し、全身震ひて、吾の極めて弱小なるを感ず。豈に是れ罪の意識にはあらずや。嗚呼誰か此の死肉より吾を救ひ玉ふ。嗚呼誰か此の醜骨より吾を拔き玉ふ。嗚呼誰か此の汚穢より吾を清め玉ふ。幾度か寒心して聖賢の前に跪拜す、但だ其の高烈にして慈悲深き御手を差し出で玉ふにすがらまくするのみ。

○堅信者の末期

死に臨みてドクトル、ハーツホルン氏の如くなるは多からず。是れ其の堅信にして來世を確認し、三寸氣息絶ゆるをもて死別となさゞるに由る。二月十日、夜深けて病俄かに革まる。博士、靜かに其の娘子を呼び、死期の近づけるを告げ、且つ曰く、亦た故に僕婢を勞する莫れ、醫師を招く莫れ、余既に命運を知れり、只だ聞かまくするは御身一人、吾なき后に生存らへ、海波万里を隔てゝ異郷の地にさすらひ、さこそ心細かるべけれ、そを如何にと感ずるやと問はる。抑も、博士の家に脳卒中の遺傳あり、博士年老いて亦自から逃る可らざるを知り、日本に遊ぶに當りて固く其娘子に言ひ聞かさるゝやうは、吾の死するは卒然なるべし、其時御身一人遺されて能く忍び玉はゞ、則ち日本に行かんと。此の信仰ある父子は、豫てより、此の痛ましき覺悟を約束せられしなり。左れば、ハーツホルン嬢は毅然として答ふらく、今更ら果た何をか恨

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

み申すべき、兼てよりの覺悟は父の知し召し玉ふ所ならんと。博士大に悅び、之より終夜打しめりて、最と濃やかなる談話を爲し、死後一切の事務を、精に申しのこし、巨細大小一つも遺す所なし、且云く、明晩は醫師を招き玉へ、是れ物の順序なりと。憶ひ起す當夜暖爐の火、夜をこめて燃えつれども、焰の氣勢如何に暗く且つ弱かりけん。博士、彼岸を望みて半ば靈眛を托し、朗然として純淸の氣を吐き、確乎たる信念に感謝して、神の慈愛を繰返し、暫くの別れに一憂一喜して、人間以上の物語を靜かに述べ玉ふを聞けば、正に是れ聖師の大說敎にして、天界の福音に異ならず。ハーツホルン孃、父の傍らに侍りて、夜をこめて唯一人此の福音を聞き、母なき後の慈愛の父に別れんとして、涙を拂つて讃美の歌を朗唱す。既にして東天やうやく白み、家鷄曉を破つて快鳴する頃ほひ、父則はち漸次に永眠し行かれける。嗚呼、此の父あり此娘子あり、而て此の父と此の娘子とをあらしめたるものは、其の堅信にあらずや。詩人もし當夜の光形を寫さば、絕世の巨作たるべし、詩人もし能く之を歌はゞ、稀代の名吟たらん。吾人の如きは、たゞ感激して其の一斑をすら記載すると能はざるもの也。夫れ、博士の死を知ると斯の如し、其の異邦にあつて永眠の墓に入らんとは、かねてより期せられし所なり。再び日本に渡來するに先だち、かの青山墓地の好風景を詠ぜられし詩あり、よく其の情を見すと云へり。

講義

雛まつり

長汀子

●謹告● 雛祭圖解の義本號の口繪として挿入すべき豫定の處、彫刻に多くの手數を要し、爲に本誌出版の期日に後れ候間、不得止次號に挿入致すべく候に付、其旨茲に御斷り置き申候（編者識）

今日は三月三日上巳の節句なり、家々の坐敷には、雛段賑はしく飾り立てられ、少女子等は、此日のうれしさに、樂しみ狂ふらん。此際雛祭の故事、由來を詮議するも、亦一興にやあらん。

雛祭の由來を察するに、上巳の身そぎ祓の故習が、かの、今時の小兒もすなる、姉樣事、または雛遊びなるもの丶いつしか一つに結び付きしものなるべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○昔の上巳

上巳の節句はもと支那より傳はりしものにしてもと〳〵三月上の巳の日を除日として、不祥を除くことあり、此日人々形代人形など作り、己が厄難を之に負はせて身そぎ祓へなどしたること、今日なほ行はる八朔の節句の身禊の如かりしなり。初めには、たゞ三月上巳の日と定まり居りしが、魏國の時代より以後は、改めて三月三日の行事となり、巳の日には限らずなれりしも、なほ最初の名をば留めて、改正以後、我邦に傳はりて、千年近くの年數を經るとも、なほ上巳の名は存せられたり。德川幕府の時代には、此上巳を五節句の一として重んじ、此日には諸侯伯熨斗目長上下にて、柳營に登城し、大樹の前に出でゝ賀詞を述べ、諸藩も亦同樣の行事をなし、民間にても此日を祝ひ殊に婦女の祝日とし、雛を祭りて樂みたり。民情は法律規則などにて變更するものにてなければ、假令明治の政府となりて、五節句の行事は廢りしものゝ、民間にては其風習依然として行はれ、重三の節句前には、日本橋十軒店の雛店、人の山を築き、府下幾百軒の酒屋は白酒の賣出しに忙はし。

昔上巳の節句に當り、禁裏にては、鬪鷄の行事あり、また曲水の宴を開かれし時代もありたりき。この二つの如きは、既に久しく廢絶して、再び興らず。

○雛遊と雛祭

本居翁の玉勝間に人の形をちひさく作りて、わらはの弄ぶものを物語ぶみどもにひいなといへるとあり。雛遊の本義は、小さき雛人形を女の子の弄ぶとなり、古今東西人情一なれば、今日の子供が、人形姉樣など並べて、夫妻事、姉樣事するを推せば、やがて源氏物語、榮花物語などに見えたる、雛遊のさま、明に思ひ知らるゝなり。雛遊は聖德太子に始まりたり、いや左には非らじなどゝ其起原由來を詮議せんことは愚しき業にて、いつの昔にも、子供は玩弄品を弄びしものにて、人間が既に家を成して、父母兄弟親子、共に住居するやうになりし世代よりして、子供殊に女兒は、家内の狀態を見倣つて、雛樣事、姉樣事を弄びしや必せり。貴賤とて情に於て違ふとなし、されば民間の賤しきに在りては、紙、ひいな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

草、唐蜀黍の皮、土人形に、民の服着けたるもの、雲上の尊きに在りては、衣冠正しき殿上人、女臈の樣したる人形をや弄びけん。源氏物語には紫の上が雛遊びして、源氏の君になぞらへたる人形に仕ふるさましたる事、または雲井の雁の姫君と夕霧の君と、雛遊びしたまひし事など作りたり。其他の物語にもまた見えたり。之を見れば其上つ代の殿上人の幼き御達の雛遊びなるものは、またく今の世にいふ姉樣事なると知るべきなり。また年若き姫君、女房などの、徒然のまゝに、雛社、雛合などして、雛遊の强ちに幼きものに限らざりしとも、今の世にさへ、丸髷結びたる若奥樣の人形抱き玉ふにも似たらんかし。

雛遊びは、元來小兒の遊戲なり、されば季節時候を撰ぶべきものに非ず。然るを其雛遊の貴族的なるもの、いつの時代よりか、上巳の節句に混入し、彼形代の人形が段々に變化して、男內裡樣、女內裡樣となり、紙雛となり、天兒となり、這子となり、さてかうなれば、雛立段を飾るが爲めに、樣々の雛道具、餘の人形例へば五人囃のやうなるものをも飾り立つることゝなり、地方によると、五月人形をも三月節句に飾ることあり。或人は天兒這子紙雛などこそ、上巳身禊の形代の名殘なれといふものあれど、それと斷じていふの必要なし。他方より見れば、またかの紙人形、葛子人形などの、やゝ進步したるものとも見るべし。且や形代なるものも、人の軀の樣を、極簡略に寫したるものにて、彼紙人形を撰ぶ所なし。故に重三の節句なるものは、いつしかに上巳身禊の形代祝ひの行事全く廢れて、貴族的と平民的との雛遊びを合同し、時節は恰も桃李笑ひ、櫻花爛熳たる長閑き彌生の三日に、さも似つかはしき雛祭の行事とはなり、殊に女兒の爲めの節句となりて、男兒の爲めなる五月五日の節句に相對するに至りたるなり。此日雛を飾り、食事をそなへ、白酒を盛り、物いり、草餅等を製して上長に事ふることを學び、なほ女兒には世帶持の稽古をなさしむるの意なり。また相識の小兒相往來して、さゝやかなる食器にて酒饌を分ちて、交際の法を習はしむるの旨なり。昔貞享元祿以前には、節句の禮とて、ひなを乗物にのせ裕ほかい持せて、親類に悉く遣はすことありしといふ(第十六圖を見よ)。

因にいふ身禊の形代の變化して雛人形となれること、八朔

にも八朔雛なる極めて簡易の雛人形なるものあるにても知らる。八朔の形代は今もなほ衰ふるとなし。上巳の身禊は古くより廢絶して、雛祭となり、春は花さく彌生に、實にふさしき行事となれるぞ、ゆかしき。維新以後太陽曆によるものからに、重三の節句も、まだ空寒き、桃李未だ言いはざるにて、何となく淋し。されば地方によりては、舊曆にて此節句を行へり。さる方、此節句本來の性質に適ふべくや。たゞに重三のみならず、他の四節句または花曆、月曆農曆、もと／＼舊曆によりて定めたるものなれば、それに據らん方よろしかるべし。强て此等に新曆を採らんとならば改めて季節の工合を計りて、定めを設けんはいかに餘事ながら筆の序にかくなん。

○雛の種類

雛祭、重三の行事となりて以來、日既に久しく、從つて其間雛の形にも種々の變遷ありし事は、往古の雛は小さく、室町時代のものといへるは、三寸四五分の丈なりしが、維新以前には、丈一尺より二三尺に至るものありき。されど雛とは小さき人形の意味なれば、大きなるは似合しからぬ故にや、今日にては雛の形再び小さく、大方三四寸位のものとなりたるにても量り知らるゝなり。

今時の雛の種類、または祭り方なんどは、人々各親しく知れる處なれば、改めていふに及ばず。されば好事の興味を起さんが爲、今人の目に觸るゝこと稀なる、異樣の雛の數々を擧げん其圖は本誌の口繪にて見るべし。此事雛の種類の圖形に關しては、玩具專門の好事家淸水晴風氏の藏品及手記に據るもの多く、また京傳が骨董集をも參照したり。偖て以下に、當號に從つて、圖形の說明を試みんに、

第一圖は室町家時代の比の雛なりといへば、今を去る五百年以上のものなるべし。男雛の高さ三寸五分餘、女雛の高さ三寸三分。男雛の冠は、欠けて失せたる樣の圖なり。

第二圖は土佐古代の雛といふ。今なほ四國邊にて見受くるとあり。後に立つる紙の鶴龜松竹など畫きて、丹靑を加へたるものは衣服の意なるべし。下なる臺の如きものは墨にて塗り、棒の下部を五色の糸にて卷けり、そは襟の意か。其上部を黑き糸にて卷き、髮の形となす。男雛は黑き糸を上まで卷かず

白木のまゝに餘し、女雛は餘地なく巻けり。此區別は即ち男女を志るすものなり。圖骨董集に見え、清水氏は其現品を所藏せらるゝよし。

○○○第三圖は薩摩の古制糸雛なり。

○○○第四圖は古への吉野雛、土製なり。凡そ土雛といふもの、吉野にも、伏見にも、深草にも、今戸にも、其他處々にて、昔は多く製出せられて、様々形を異にしたるがありしが、現今は衰へたり。されど田舍には今猶行はるゝ處あり、現に關西などにては、雛市に、土雛の賣出さるゝ地方尠からず。此種の雛は、元來田舍人の質素に、重三を祝はんが爲めの料に出來しものと見えてゆかし。

○○○第五圖は薩摩古製の紙雛なり。圖に見えたるは男雛にして、女雛は髮の中處を紙にて結びたると、襟の色取少しく異なれり。薩摩の紙雛は形他國のとは全く殊なり、其種類また頗る多し。

○○○第六圖は姫瓜雛なり。姫瓜は形狀の卵の如くにて、色白く、時には黄なるあり、其大さ梨の如し。形の美しきを以て姫瓜の名あり。女兒等此瓜を求めて、少しく莖を留め、白粉を其面に塗り、墨を以て目口鼻等を描きて弄ぶ。元祿前後に多く流行せしよし。志かし枕草紙に「うつくしきもの、うりにかきたるちごの顔」などいへれば、いと古き頃より瓜の如き、人の顔貌を描くに都合よろしきものを人形となして弄びしならん。さる遊戯は今の世にもあり。姫瓜は攝州住吉郡遠里小野より出づるもの、昔は名ありき。圖に見えたるは、女雛にて、男雛は着物の袖短かし。此雛は雛の名あれども、其實は八朔の雛なれば、三月のものにてなけれども、序ながらに示せり。

○○○第七圖は元祿時代のものといふむつび雛なり。男女ともに上部は裸躰なり。世の中の風儀亂れし頃とて、斯樣のものも、造られしにか、また別に意味ありて出來しものか。

○○○第八圖は昔讃州地方にありし雛にて、これまた秋雛なり。頭はひいな草、躰は竹、花立の形をなせり、衣服は色紙なり。

○○○第九圖は琉球國の雛なりといふ。清水氏之を藏す。此雛によりて考ふるに、薩摩の古制雛は、琉球より移り來りしものなるか。

○○○第十圖は八丈島の雛なり。彼島民にさも似合しき雛なるぞをかしき。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○○○第十一圖は薩摩紙雛の一種なり。

○○○第十二圖は昔伊勢の山田あたりにて女子のもて遊び草にしたる小米雛といへるものなり。大さ五六分計り、全躰紙にて、顔も亦紙ひねりなり。この雛に着する紙衣をば、其地方にてはきいとかいへりしよし。鳥の子などの巾廣き紙に、坐敷、客間、居間、台所など家のさまを描き、小米雛の夫婦或は僕婢などを造りて、其さし圖の所々に粘付けにして、人家平日の和樂親睦の状をまねびたるよしなりしが、享保の季あたりより後は、この雛絶えたるよし骨董集に見ゆ。此雛遊は節句に限りたるものにてなく、たゞ女兒が平生の遊戯の姉樣事なり。

○○○第十三圖はひいな草にて製したるものなり。伊勢桑名地方にて、九月九日重陽の節句に用ゐし雛といふ。其地方にては、此草を葛子草といへり。

○○○第十四圖は元祿十年印本鳥居清信が描し繪の中に見えたる、當時の雛祭の樣なり。其頃は別に雛段といふものもなくて、敷物の上に平たく立てしものと見えたり。圖の左方に立てたるはおとぎ這子なり。これは形代の遺制といふものにて、昔は此ものゝ背に、持主の厄難の箇條を記して、水に流したりといふ。元祿十年は今より二百年以前に當る。

○○○第十五圖は享保十七年頃の畵にて、これ又其當時の雛祭の有樣なり。享保は百七八十年以前に當り、此頃には、僅に一段を設けて、雛を祭りし樣に見えたり。

○○○第十六圖は即ち前にいひし雛使の圖にて、天和貞享の比菱川師宣の描ける年中行事の印本中の圖なりといふ。以上三圖共に骨董集による。

○雛祭餘談

たゞに三月節句のみならず、八朔にも雛を祭るとあり、九月九日にも後の雛とて重三よりも盛んに行はれし時代ありしとぞ聞く。今もなほ紙雛に菊の枝を添へたる掛物など見受けらるゝなり。實に菊花の露に千代の齢を延ぶてふ、重陽の節句に、雛祭の行事あるもゆかしき心地す。

今日は雛樣に白酒を備ふること全國一般の風習なれど、昔は醴酒を備へしものゝよし。

昔のいひ傳へに、船に乗る者は雛一對を所持せば、海上風波

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の難を遁るといふことあり。また雛をば井堀り、屋根葺、柱立てなどにも立て用ゐて祝ひたることあり、また之を井の中に入れて、清水を祈るの風習ありしとぞ。

○雛遊の將來

一時廢りし雛遊も、ことしは亦た再興の氣運あり、商人の仕入、買手の意氣込、前年迄の寂寞に似ず。夫れ新暦の三月三日既に斯の如くなれば、舊歴には更に賑やかなるべく、ことし東京にて斯の如き以上は、來年より各地方に行はるゝと亦盛んなるべし。扨て將來此の遊の運は如何なるべきと云ふに、斯る由緒あり、經歴あり、趣味ある遊びは成べく保存し、亦又用ゐて女學の一助となしたし。すべて古來の遊戯の害なきものは皆珍重したきに、況して此の遊の如く高雅なるをや。此講義の雜誌に顯れて、世上に公にせらるゝ頃は、重三の節句を過ぐること一週の上にも餘りぬべければ、少しく時節後れの感なき能はざるも、考古の記事とて、讀者の參考に供すべき節多かれば、此に載せつ。

史傳

史料散錄（三）

如雲

◎慶長十一年、家康駿府へ移られしが。其の十月、江戸へおはして、これ迄江戸西城に貯へ置れし黃金三万枚（大判）銀子一万三千貫目を其まゝ將軍家へまゐらせらる。其時、江戸の老臣へ仰せありしは、これは御身の奉養に用ひ玉はず天下の物とおぼしめして此上にも積貯へ玉ふべし、かく貯へ玉へと云ふは何の爲なれば、第一は軍國の費用に備へ、第二は不虞の大災にて御居城はじめ城下の士民まで燒亡にあひて艱困せむに、之を賑救あらむが爲、第三は日本國中に守護地頭を建置て万民飢渴せざらん設あるなれど、また如何なる凶荒打續て其力も及ばざる時には、上より守護地頭に力をそへて夫々に頒布して救荒の政を施さむが爲めなり、これぞ天下に主たるもの丶本意なれ、かゝるをもて常年の入額何ほど餘分

ありとも、あだに心得てさまで功績なき者にみだりに新地與ふる事あるべからず、將軍にはいまだ年若き事なれば、こののち男子いくばく出生あらむも知れず、これまでわが末子にとらせし祿額もあれば將軍の子達も之に准じ五万七万ばかり遣しては國躰に於ていかゞなり、ゆゑに天下の祿額のかねて減ぜぬ樣に致し置事經國の第一なり、その旨よく心得て將軍に申上よと仰られしとぞ傳ふ。

◎太閤秀吉の朝鮮征伐は何の爲め發企なりしか、英雄の心洪大にして測り盡すべからず、素より之に種々の思はくありしとは言ふ迄もなし。但し其の中の最も大なる志の一つは、當時朝鮮に多くありし砂金、金類を我國に持ち歸らせん爲めなりしとは明白なり。正直なる清正に拮抗し、あれほどの勢力を持ちし攝津守行長は大金持にて、而も朝鮮に寶藥の寶子を餘計に出し置しくせもの也。此の行長が當時大に用ひられし所以など一つの考へもの也。

◎中井竹山曰く、總じて幣を作るに大道あり、上には益なくとも下に損あらしむ可らず、上に利あらずとも下に害あらしむべからず、天下に布くの實は天下に之を共にすべし、焉んぞ私意を其間に措く可けんや、周易の下を損して上に益すを損の卦とす、上を損して下に益すを益の卦とす、万古不易の要道たるを見るべしと云ふ。

◎德川氏開府以來、財政の困難を極むるもの數回に及ぶと雖ども田租の增加、新稅の賦課は民情の許さゞる所なる乎、陰に寶貨を改造し其品等を降して府庫の窮乏を補ひし時代もあり、儉約を履行し財政を整理し或は貨幣を改鑄せし時代もある也。

◎征韓論と云ふとは文久年間より幕府の士の密かに言ひ合へりしとなるが、其の眞意は朝鮮及び支那の貿易の爲めなりし也。西鄕南洲の征韓論も、其實は通商の好結果を希ふにありしと明白なり。

◎西鄕先生が薩摩の改革にて最も難儀せられしは奧女中なり、三十人ほどの女中に取まかれチイ〳〵泣かれて、流石の西鄕先生も大に弱られしとぞ。

薄氷やわづかに咲る芹の花

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雜録

小説 磯馴松

下

紫琴女史

青き松白き砂、名にあふ舞子の濱のなかも、そしや暮色に蔽はれて、呼はゞ應へむ、淡路島山の影も漸く海墨に、、、なるとの彼方にほの見えし紀伊和泉のやま〳〵は、雲かとばかり波に消えつ。鏡のやうなる海面も、どんよりと黒みゆきたれど、波に尾をひく夕日影は、西の海に金色の名殘淀はせつ。暮れむとして暮れはてぬ夕景色、夏ならは此所千金の一刻なるべきを、今は都人の花に醉ふ頃なれや、こゝらそゞろ歩行する人は稀なるに、病を此所に養なふ人やらむ。老若二人の婢に冊かれて、何れ身分ある人の奥樣と覺しきが、前刻より此松原を、ゆきては戻り、戻りては行き玉ふは、晩餐後の運動にもや。奥樣はいと沈みたる調子にて、獨言のやうに、

あゝわたしは眞實に世が嫌になつたよ。なぜこんなに心細い氣がするんだらう。此所へ來た當季は、餘ンまり景色がいゝもんだから、何も角も忘れて仕舞て、素の活々とした身躰に返つたやうだつたが、慣れて來ると又いろんな事を考へ出していけない。なぜうき〳〵とした氣になられないんだらう。眞實に私は自分で自分の身が嫌になつたよ。こんなにくさ〳〵して生てるんなら、死んだ方が餘程ましだわ。なぜ死なれないだらう……

詞の末は半消えて、いつしか立止りたる足の、白く細き爪先にて美しき砂を弄びながら、猶も思ひ兼玉ひたる樣子に、老女は態と輕くホヽと受けて、

又奥樣そんな事を思召升ては、いよ〳〵お身躰のお毒でござり升る。兎角さうお鬱ぎ遊ばすのが、一ッは御病氣なので御坐い升から、斯うして御養生に御越遊ばしました限りは、何事もお思ひ遊ばし升ぬが宜しう御坐り升る。何のあなた、小癪な事を、申上るやうでは御坐り升るが、命あつての物種と申すでは御坐り升ぬか。何が何で入らつしやい升う共、御身躰が一番お大事で御坐り升る。必ず〳〵きな〳〵思召てはなり升ぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いひかけて四邊に氣を配り、若き婢の三四間後れたるに心を許し、

何のあなた、旦那樣だと申上升ても、いつ〳〵迄もあゝでは入つしやい升まいー。ほんの一時のお物好で遊ばすのでござい升うから、あんなもの位にお氣をおひけ遊ばさないで、何でも早く若樣でもお孃樣でもお設け遊ばすやう、一日も早くお達者におなり遊ばせな。オホヽヽ、夫れが何よりのお勝で御坐り升る。

とは如何なる子細ありてやらむ。奥樣はいとゞ是にむつがらせ玉ひて、血の氣とてはなき唇を嚙〆玉ひ、

又ばアやはそんな氣休ばかしいふよ。人を、人をッいつまでも子供のやうに思つて、賺さうとしてももうだめよ。夫れよりか一所に泣いて吳れた方が、いくら力になるか知れやアしないわ。

露かあらぬか、奥樣のお袖にははら〳〵と玉散りて、お顏を背け玉ふ彼方の木影に、しよんぼりと立ちし男の子、田舍にも珍らしきまでむさげなるが、是もしく〳〵泣き居る樣子に、奥樣は我を忘れて、いぢらしがり玉ひ、

ばアや、何だらうあの子供は、可愛さうに泣いてるぢやァないか。聞て御覽、連れにでもはぐれたんぢやァないか。

老女も御機嫌損ねたる末のよきつき穗と、

オヤ左樣でござい升ねー。承つて見升う、どう致したので御坐い升か。

いひながら彼子の傍へ立寄りて、優しく問掛しに、子供心にも人の深切身にしみ〴〵と嬉しくてや、忍び泣の急に切迫して、泣きしやくり上げながらのとぎれ〳〵、

あゝおらァおッ母ァを探しに、須磨まで行て來たんだ。ちやんがお酒ばかし飲んで、構はないもんだから、おッ母ァは去年の暮に何處かへ行て仕舞たんだ。

ヲヤお前のやうな可愛い子を置いてかえ。

あゝだからおらァ夫から毎日おッ母ァを探してたんだ。夫れでもまるッきり知れないから、おらァいくらちやんに、おつかァを呼んで來て吳れろッて、賴んだか知れやァしないんだ。

さうだらうとも〳〵。

するとちやんが怒つたァな、あんなおつかァがそんなに戀

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

しきやア、おつかアの所へうせろッて。おらアおつかアの處へ行れる位なら、始ッからちやんを頼みやアしないや。それからおらア……

と愈泣聲になり、

おつかアに逢ひ度ッても、ちやんが怖いから何もいやアしないんだ。おつかアの事をいふと直ぐ叱るから。

オヤマア可愛さうに、さうかい。

と老女は復命代り奥樣の方を振向きぬ。奥樣は傍の松の幹にもたれて、餘念なく聞入玉ふを、老女の瞳につれて此方向きし子は、不意に奥樣を認めて、其神々しきまでと蒼白く美しく、高尚きに氣を打たれ、圓き眼を瞠りて見詰め居たりしが、再び老女に。

夫れからどうおしだえ。

と問はれて我にかへりたれど、猶も奥樣の方を氣にして、我知らず着ものゝ前など掻合せながら、

だけれどもちやんが正月から煩ひ出して、仕事にもゆかず、好きなお酒も飲ないで、寐てるんだ。おらアほんとにどうしやうかと思ふと、又おつかアの事を思ひ出したんだ。でもちやんはもう叱らないよ。おつかアの事をいつても……。ねえ伯母さんちやんはもうおつかアの事は怒つて居ないんだらうか。ねえさうだらうね。だからおらア又其所等中聞いて歩行たんだ。おつかアを連れて來やうと思てよ。

實にもとうなづく老女の顔を見て安心し、又そつと奥樣の方をぬすみ見るに、目瞼もせで我顔をまもり居玉ふに氣後れしてや、しばし行つまりて又覺束なき語句をつゞけ、

するとおつかアは須磨の村雨亭といふお茶屋に居ると敎へて呉れたんだ。近所の桂庵の婆さんがよ。

怨めしさうに顰顔はせて、

夫りやア先から知つてたんだけれど、おつかアがいつちやアいけないといつたから、夫れで言はなかつたんだよ。でもちやんが煩らつてるものだからッて、内證で敎へて呉れたんだ。夫れも今朝の事よ。だからおらア直ぐ其足で須磨まで行つて來たんだ。

エ須磨まで行つたのかえ、能くまア獨りで行かれたね、可愛さうに。

と老女目をしばたゝきて更に奥樣の方に向ひ小腰を屈めて、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

何でござい升とね、是が獨りで須磨まで參つたので御坐り升と。

奥樣も聞き居玉ふとを改めて傳達するも、餘りの事に感心してなるべし。奥樣もしば〳〵點首き玉ひ、始めて優しきお聲にて、

さう、そして分つたかえ。

老女に聞くともなく、彼子に聞ずともなく問ひ玉へば、

あゝ分つたよ、分つた事は分つたんだけれど……

大粒の涙をボトリ〳〵と落しながら、

おッかァは疾くに大坂へ行ッちまつたとさ、何でも大坂から養生に來てた、金持の旦那に連れられて、行つたんだと。

此一句に老女は端なくも奥樣と顏見合せて胸轟かせつゝ、忙しく子供に向ひ、

フム不思議な事もあるものだね、ではお前のおッかァの名は何といふの。

あゝおッかァはお千代て云んだ、おらァ松坊サ。

家は何處だえ。

明石なんだ。

オヤと老女振向きて、そと奥樣のお顏色を窺ひしに、奥樣は色も變らせ玉はねど、老の僻目か、御目の底少しきらめきし樣にも覺て、よしなき事を聞出せし何となく心安からぬに、子供は何の心もつかず。又も無邪氣に老女を顏を見上ながら、

なぜおッかァは大坂へなぞ行つたんだらう。大坂は餘ッ程遠ーい處ぢやァねえか、なァ伯母さん。だからおらァ何しに行たんだと聞くと、茶屋の奴め大變に笑やァがつて、知れた事だッて、敎て呉れねえんだ。だつて伯母さん、誰だつても聞かなきやァ分らないぢやないか。でもおらァ餘ンまりいま〳〵しいから、夫れッきり飛出したんだ。で早く歸らうと思つて此所迄せつ〳〵と步行て來たんだけれど、あんまり足が痛くなつたから、少し休んでる内に日が暮れかゝつて來て、あゝ淋しいなと思ふと、又おッかァに逢たくなつたのだ。だから今泣てたんだよ。どうしやうねえ伯母さん、おッかァはもう歸らないんだらうか。おッかァが歸らなきやァ、おらァ一人で煩らつてるちやんそ、どうする事も出來ねえから。おらァはやく大きくなりてえや。

かゝる折には他人ながらも、其人賴母しく思はれてや、彼は

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

又老女の顏を覗き込みて、

「伯母さん、家へ歸つても、ちやんは怒りやアしめえか、何ともいはないで來たんだから。エ、エ、……

屢問へど、老女は兎角奧樣の、お顏色のみ窺ひて、頓には慰め兼たるを、もどかしとや奧樣の自ら進み出で玉ひて、勿躰なや美しき手にも汚き子供の頭撫で玉ひ、

「お案じでない、今私がいゝやうにして上るから。

老女に何か囁き玉へば、老女は心得て若き婢を招き、仰を傳へたりと覺しく、彼は小走りして何方へか行きたるが、やがて小やかなる革提撥へ來りしを、奧樣は力なき手に其を開き、中より幾片かの紙幣とり出で、老女に渡し玉ひしかば、老女は万事其意を得て、之れを子供の肌へ、落ちぬやうに手拭もて括り付けながら、

「ほんとにお前は仕合せものだよ。お慈悲深い奧樣に、たんとお禮を申上ないでは濟ないよ。奧樣が此夥しいお金を、お前にお惠み下さるんだから。落さないやうに持つてお歸り。さうすればちやんも怒らなからうし、又一月や二月は、お父ちやんもお前も、是で樂々と御飯が戴けるんだから。屹度落さないやうに氣を注るんだよ。奧樣も今では此所に入つしやるけれど、矢張お家は大坂なんだから……

といひかゝるを、奧樣目顏で制し玉へば、老女は本意なげに口を鉗みたれど流石に老の繰言止め難くや、更に詞を更めて、

「時節が來たらお前のおッかアも、おつゝけお暇が出やうから、其時は又明石へ歸らないものともいへないわね。どうせ茶屋小屋に居た女が、いつまでも御大家に居て、奧樣を蔑にして居る譯にもゆくまいから。ね、だから若ひよつと、此後お前おッかアに逢ふ事があつたら、忘れないでいふんだよ。何時何日頃舞子へおつまといふ婆がお附き申して、御養生に入らッしつた、夫れは〳〵お前よりは餘ッ程美しい奧樣の、お救ひを戴いたといふ事をね。屹度忘れないで話すんだよ。夫れがお前、奧樣への何よりの御恩報じなのだよ。

子供ながらも、餘りに人の情の訝しく、奧樣と老女の顏をのみながめ居るを、是も奧樣のお心添にて、途中心もとなしとや、宿やの車にて送らせ玉ひぬ。

* * * * *

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

其後五六日を經て明石の町より、天ぷら蒲鉾など小さき荷籠に入れて、舞子のあたりまで賣歩行く子供あり。雨の朝も風の夕も、此子の呼聲聞えぬ事なければ、人々の殊勝がりて、年もゆかぬにと、其身の上尋ぬれば、

おらアおつかアは居ないんだけれど、他所の美しい奥樣に、たアんとお金を貰つたから、夫れでかうして稼げるやうになつたんだ。ちやんも鹽梅が直つたら、お酒も飲ないで稼ぐといつてるから、おらの許は、今に金持になつて見せらア。金持にせへなりやア、おッかアはどんな遠い處に居たつても、歸つて來るんだとちやんがいつてるよ。だからおらア何でも稼いで金持にならなきアならないんだ。

威勢能く答ふるに評判賣れて、今も其あたりに肴屋の松坊松坊とてもてはやさるゝは此兒なりとか。されど彼病みて美しき奥樣と、健にて忠實なる老女とは、今猶其處に在りやなしや。難波江も、名には聞かねば、知るよしなきぞ憾なる。

片々錄

◎日本橋通りの土藏附の家に居附の商人などは、床下に黃金を埋め、一家の興廢に關する危急の時ならでは決して堀出さぬと云ふ樣に仕てありしものにて、近年まで依然古格を守りしものもありしが、此頃は最早や之も無なりしとと思はる。何となれば、其人等迄が株劵に手を出すやうになりし故なり。株劵に手を出す程にて地中に黃金を埋め置く辛棒は出來ぬものと推察して之を知るなり。

◎三縣下の鑛毒驚ろくべき程なるに、農民の久しく不平を叫ばざりしは、反つて古川市兵衞氏を徳としたるに由る。何故に徳としたるかは、其の多少の鑛毒代償金を與へしに由る。夫れ、河水汎濫の水害に慣れたる農民は、此の河水よりして來る鑛毒をもて天災の一と心得たり。而して、天災の結果に對して古川氏が若干の金を分けられしは格外の僥倖にひとしと感ぜしとぞ。聞くだに涙の落つる話ならずや。此の可憐の農民を救はざるは慘逆にひとし。

◎毎日新聞に連載する「旗本五人男」は燕枝が自から筆記するものとかや。三月二日の紙上に、伊丹屋十助が、鼈甲屋平六より櫛の始末を聞取る一段あり、

「ハイ〳〵それが、ナル、ヘーエ、彼方の御主人のお娘子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

が、ウム罪を嫌つて昨夜家出、イエ能くある事で厶ります、そこで、ナアル、ナ……、ウ心當りを尋ねても皆目所在が分らず、ウム、所へ貴公が三軒町の質屋へ入札で、ナアル、所へ彼寅吉と云ふ者が櫛を質入に、ヘーエ、其櫛は貴公の手で、ナアル程、其娘さんに去年の恭賀た品、ヘーエ、悪い事は出來ませぬな、ナ、ナ、それではまだ彼男が取たと云ふ譯でもないのか、そこで貴公が糸屋へ行て聞合せると、昨夜娘子が逃る時持て出た、ウム所で彼寅吉に、御光ナアル、厳しく詰れると、ヘーエ、私方の門先で今朝夜の明方に拾つたと言ひますのか」

此等をこそ文字の活たるものと云ふべけれ。文章の秘訣も然にありと言ふべし。前年、菊五郎が[illegible]獨居士の作に辭のアキが無く究屈にて働らきの入れ所なしと恨みしも、畢竟此處の事ならん。

女護島風俗（與那國島の話）

往昔女護島と云へば常婦孫女媾遊の話柄となり女子ばかり住む不思議の國もあるものよと語り傳へられしも適殺同島に渡航せし人の談話を聞き得たれば左に之を

詳記せんに往昔の女護島即ち今の與那國島は琉球群島の最南に位し北緯廿四度六分東經百二十二度四十五分に當り臺灣が帝國の版土に入らざる前迄の我邦の最南極端なりさし周回殆んご百里餘もあらんか島中に一の良港なく又かゝる僻遠の地なれば外船等は邦人の之を訪ふ者極めて稀にして如何なる浮世の荒波も此處に打寄することなく隨つて人情風俗素樸質實にして路遺たるを拾はず夜戸を鎖さずして盜賊の恐ひなく幼は老に讓り强は弱を凌がず而して同島女子の數は男子の五倍に當り男子は逸して女子は勞す斯く女子の數男子に優るも一夫一婦の制は堅く行はれ其間に淫猥の風少しもなし左れご女子の男子を慕ふは自然の人情なれば若し内地人の同島に碇泊上陸することあれば彼等之を眷戀すること甚だしく往々一人の男子に三四人若くは五六人附き纒ふことあり而して十數年前までは是等女子が男子を待ふの方法は此島に上陸する者ある時は數多の草履様のものを列べ置き之を穿きたる者は其持主の情人と定めしと云ふ同島に渉航する支那人西洋人もありし事も日本の人と云へば殊に彼等か敬愛する所にして出帆の際は種々の情禁じ離く埠頭若しくは本船まで送り屆け忘れ遺物として赤き金巾を贈ふを以て無上の名譽と爲す斯く女子の多きより男尊女卑の風甚だしく男子産れせし時は杯を擧て之を祝するも女子を分娩せる時は全く之と異り悲哀の詞を述ふると云ふ以て知るべし此の如く同島に女子の多きは昔時八重山島等より女子の産れし時は多く之を同島に流したるが爲めなりと云ふ同島の或る一村に御曹子八郎爲朝の遺孫と云ふなる一豪族あり島人は非常に之を尊敬す又島人は日清戰爭以來痛く外船の入來を恐れ木羽商買の乘組し船の同島に碇泊せし時も島人の慈博醫援冠から米の使節ペルリ來航の時の浦賀の如くなりしと云ふ

同島は現に沖繩縣の管下にあれば戸長役場あり巡査駐在所あり小學校も建設せられて文部省檢定の教科書を用ひ父老は重に琉球語なれども小學兒童は皆く日本語を解し且つ語る文字は象形文字にして之を例せば◎を鷄卵一個とする類なり家屋は重に藁葺にして低陋不潔なれども床はありて疊は琉球表を用ひ室内にはランプを用ゆれども極めて粗末の物にて一村に之を有する極めて少なし島人は跣足にて之に上下す最も土地は砂地なれば汚るゝこと少なきに因るならんが夏は多く芭蕉布の單衣を着け頭髪は琉球人の如くつくれ髮にして揚枝の如きものを指す土地は

耕て耕作に適せざるのみならず多くは耕耘せざるが如し偶には畑の狀を成せるもののありと雖も未だ不完全たるを免れず大抵の作物は岩石の間となく竹籔の中となく唯だ其儘に植付け或は播付くるのみなれば固より肥料など施す道を知らず作物の重なるは甘藷にして彼等は之をカライモと呼べり米は出來ず粟、稗、豆等其他の產物は多少あり島人の常食は重に甘藷、魚類にして野菜をも食すれども米を食する者は殆んど絕無なり鷄と卵は頗ぶる多く小鷄一羽の價は凡そ五錢迄なり魚類は近海に多く棲めども漁具極めて不完全なるが爲に收獲は意外に少く其捕獲の方法は最も可笑く首の屆く限り海中に身を沈て眼鏡を掛け水中の魚類を透し見て之を釣るか或は手つからと之を捕ふるなり而して之を捕ふることに極めて熟練せり同船が此島に着せし時波上に異樣の者の浮べるを見て乘組人一同奇異の思ひをなせしに之を熟視すれば右の漁夫等が魚を捕獲するなりと分り果ては大笑なりしが島人が外來の客を遇する至て親切にして之を村長の家に導き終夜謳歌を催ふしジャミセンにて內地の三味線の如きものを彈き怪しき舞踏を爲して歡待至らざるなしと其謠ふ中にはヨイザイ節とて九州に專ら流行する俗謠なりとぞ本船の出帆に際し鷄卵其他の土產物を數多贈り越せり其情愛の濃かなる感服の外なし島人は他との交通稀なれば郵便、新聞などの來ることなく時に村役場に官報の來るを見るが切てものとなり其他に尙ほ多く聞込みたる事あれども管々しければ今は省きぬ

●ナイヤガラの瀑布は世界一の大きにて其音すさまじきものなり。ナイヤガラの名は元と雷鳴轟々たる意味なるが、眞とに名詮自證と申すべし。其の響二三里に聞ゆるほどゆゑ、瀑布の近邊にては、見物同士互ひに談話しても耳に聞えざるほど也。左れば、此のナイヤガラの村に一宿する客人は、響の巨大なるに驚ろかされて夜中どても眠ると能はざるほどなるに、村の居付の人は、此の響を毫しも氣にとめず、殆んど響のあるを忘れ居るほど也。夫れ、其心の刺激の響は元と雷霆の如くなれど、屢ば之に慣れて無頓着に暮せし人は、遂に全く其の響を聞かざるに至る。（博士フルベッキ氏）

◉父は子に對して能力あり、父は子に對して智慧あり、父は子に對して慈愛あり、父は子の總べての事を知れり、父は實に子に對して小さき神たる也。故に神は天にある大いなる吾父と云ふとを得べし。父によりて神を知り、神によりて父を知る、孝の字の新らしき意義は、基督教によりて初めて說明せらるべし。（本多庸一氏）

時文

◯孝明天皇御遺德　國光社版

先帝三十年の御祭忌に際し、其御遺德の跡を尋ねて、叢塵韜晦に隱したる、其不世出の御英志御盛業を仰ぎ奉らんとするは此書なり。卷首編年體を以て、孝明天皇往の御一代を敍述し、それより先皇の聖德の聰明、夙成にいまし、慷慨孤憤の御志篤く、豁達、忍耐にいまし、仁愛に富み玉ひしことを記し奉れり。先皇御英武の大御心を窺ひ奉らんと欲するの臣氏はよろしく一讀すべきものなり。

◯臺灣事情　松島剛 佐藤宏 共編　春陽堂版

本書は松島佐藤の二氏が、彼臺灣に二十餘年の間在留して、教育傳道の事業に孤

身を挺んで、落落せるショルナ、レスクー、マッケー氏の著書に基きて、編述したるものなり。寄樹島の歴史、地質、植物、動物、人種、熟蕃、生蕃、頭顱數、宗教、社會生活一斑、產物、輸出入、等を記述する頗る詳細に、以て經世家、學者の讀書に供すべく、又統纂載する處のマッケー氏の傳道、支那人間の布敎、蕃人間の布敎、傳人來、社會的事業等は宗敎家、敎育家の知らざるべからざるものたり。

○袖珍府縣明細地圖　松島剛編　　春陽堂版

地理書の著述あるを、既に十種の以上に在るを以てしても、如何に其地理學に熱心なるかを知らる〻松島剛氏、こたび新に各府縣の明細なる區分地圖を編述せられたり。地圖明瞭、製本携帶に便にして、加ふるに、各府縣の統計、鐵道及滊船案內を以てしたれば、學生經世家、旅行者の用に資すべきの好書たり。

○中學國文　小中村義象 今泉定介編　　吉川半七版

中學教育の用に資せんとする一種の國文讀本にして、卷數六より成り、尋常中學の五學年を通じて、讀習せしめんとするの目的なり。編述の材料は、重に倫理、歷史、地理、風俗、博物等なるべく普通教育に關係あるものを撰び、間々花鳥風月の美文をも採用したり。而して此等を採る、專ら近世の文學よりし、また時に邦人の漢文を飜譯して載せたり。此等の數點は卽ち此書の特色として見るべきもの歟。卷數の順序は、文章の難易により排列せられたれども、第一卷と、第六卷との文字に、著しく認むべき難易の徑庭なきは、日に月に、學藝に進步する學生の讀本としては、いかゞにやと思はる〻節なきに非らず。

○科學雜談　四理學士著　　博文館版

四理學士の少年の勉學に資せんとして、平易簡短に、且つ面白く記述したる、種々の理學談の、曾て少年世界紙上に掲載せられしもの、今一の一小册となりて出版せらる。少年の讀書たるに適す。

○英語學講義錄　第一號　　英語學攻修會

英語に精通するを以て世に名ある井上十吉氏の講述を收むるものなれば、現今有假の講義錄たるやいふまでもなし。作文、會話、尺牘法、和文英譯、單語集、譯讀、註釋等、丁寧親切に講述しあれば、英語を學習するもの之によりて益を受くること多からん。

○淨瑠璃名作集　　博文館版

近松以後の作者、出雲、綱者、小出雲、半二其他諸家の淨瑠璃は、巢林子の諸作（世話物を除く）よりも、適に俗耳に適して、而もまた各文學として、世々に傳へらるべきの傑品を有せり。博文館の帝國文庫第四十六編として校訂出版したる淨瑠璃名作集は、收むるもの十二種、菅原、伊賀越、妹背山、忠臣講釋、千兩幟、御所櫻、大內鑑、千本櫻、廿四孝、兜軍記、盛衰記、脊柳硯等は、皆久しく人口に膾炙して、また其想といひ文といひ、共に淨瑠璃中の名作傑品たり。されば好文の士は、宜しく此名作集を坐右に供ふべし。

○講談相撲 最負くらべ　　春陽堂版

曾て讀賣新聞に連載せられたる講談師物語及關取物語を一冊にしたるものにして、講釋師、相撲の逸事、奇聞、珍談等多く集められたれば、徒然の友として頤を解かしめ、憂を散ぜしむるに足る。

○阿部仲麿　雨谷一菜庵著　　民友社版

少年文學の出づるもの此頃頓に多きを加へて、民友社よりも亦續々少年史譚第十二編を出さんとして、第一編阿部仲麿新に出版せらる。記述の詳悉文章共に、博文館の少年歷史譚と伯仲の間に在り。

○近世偉人譚　冷血熱著　　春陽堂版

偉人譚には日下部伊三次あり、女將軍お登勢あり、坂本龍馬あり、六無齋先生あり、崋山あり、山陽あり、月照あり、彥九郎あり、關東布衣君平あり、藤本鐵石あり、澁谷伊與作あり、堀織部正あり。此等の偉人豪傑の奇聞逸事の特に目立し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ものを擧げて、叙述の筆は小說振りに、文字美しく、通讀の勞を覺えざるが中に、數多の偉人の面目に接するの思ひあらしむ。

○三人武士　櫻癡居士作　博文館版

袖珍小說の第五編「三人武士」の稗史十六回は、彼足利持氏鎌倉に叛して亡び、遺孤永壽王僅に死を免かれて、草莽に隱る。時に小宮山太郎、神崎右近、小河常陸介の三士あり、思肝義膽を碎いて、遂に永壽王を擁立して、鎌倉の主となすといふ、正史に基いて、架空の作說を加へたるもの、文は流石に櫻癡の筆とて、こゝぞといふ働きこそなけれ、まことに面白く讀み流さるゝなり。

○東武士寫眞美學　逐波居士著　春陽堂版

中島逐波居士が其先人の實跡を淨瑠璃躰にものしたるものなり。之を一曲の淨瑠璃として見るときには、手の屆かぬ處、隱のきかぬ處多く、よりて人物の活躍に乏しきこそ憾みなれ。

女學文壇雜俎

二月中

◎婦女子と社會との關係（柴軒生）　東華第一號
◎日清戰爭後に於ける婦人の覺悟（山口逍洒流）　大日本婦人教育會雜誌第十號
◎婦人論（枯柳）　裏錦第五十二號
◎閨秀文學に就きて　女鑑第百二十六號
◎友としての女子、妻としての女子（坂本三七郎）　同上
◎女學生に望む　同第百二十七號
◎婦人の心得に付き古今の異同（西村茂樹）　婦人弘道叢記第二十九號
◎福島保嬰學校實驗譚　教育時論第四百二十七號
◎北陸婦人の月經に就て（山田謙治）　統計集誌第百八十七號
◎婦人の爲に（押川方義）　實業叢第十一號

片々

◎奇妙の規則　高知縣高等女學校にては、此程校規振肅の爲めとて、同校より縣知事に差出したる新規則窓中に奇妙の條目あり、曰く衣服は木綿物に限る事、髮には飾りを懸けざる事、白粉は全く廢する事、此等は可なり、されど淡化粧にするは先づ差支なき事と但書したるは頗る奇なり。

◎臺灣の月給取は女　臺灣にて月給取と云ふは女なり、男は月給の取次人なり實に淺ましき次第にて當地の女は九州又は大阪邊のものにて、金を吸取ること南京虫の如し。（都新聞）

◎下田婦女の惡風　下田港は船着き場所だけに、船頭を對手に色を鬻ぐの阿娘多く、良家の娘すらも往往娼婦を凌ぐの醜を演ずるものあり。此惡慣は汽船交通の今日に於ては、昔時の如く甚しからざるも今尚ほ兩親が娘に勸めて、其醜行を奬勵するの餘風あるは慨かはしきの至りなり。（東京日々新聞）

◎岡山孤兒院月報　に左の記事あり、

先夜一枚の敷蒲と一枚の給をクル〳〵と卷きて、活版部の門内に置きありたるが亦今朝（一月二十九日）養育部の門内に結構なる大蒲團を投込みてありたり

誰人の同情かは知らされど感謝を以て拜受せりと

◎教育報知　叫んで曰く女子教育の論議將に盛ならんとして、復沈衰せり、是れ果して何の故ぞや、若夫れ女子の智徳進まざらんか、家庭の改良を如何せん、將た女子の品位高まらざらんか、社會の品位を如何せん。教育家たる者及學政當局者たる者、大に顧る所なくんばある可らず。

◎某閨秀小說家い逝て後　故人を見ること我物顏にする名代の文士あり。如斯きは處女に對して、甚だ禮を欠ぐの所爲。

◎万國婦人大會　昨年伯林府に於て開かれし、万國婦人大會の出席者は殆ど二千名に達し、席上使用するを許されたる言語は英佛獨伊の四箇國語なりしとぞ。

◎婦人官吏　北米カンサス州に於ては、未だ婦人に參政權を許容せざるも、既に參政權を與へたる他の諸州に比して、婦人の官吏となるもの多く、二十箇の郡は既に婦人を以て學校の監督者となし、二箇の市町に於ては市長より、警部に至る迄盡く婦人其任に當り居れり多分次期の立法會議に於ては、必らず婦人參政權問題は起るなるべし。（東京朝日新聞）

◎赤兒の服に就て母の心得　ホノルヽに於る衛生會の醫會の勸告によりて訓令し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たるものさいふもの教育公報に抄錄せらるゝこと左の如し。

小兒の盲目となるは、多くは生れて二日より二週内に眼病を煩ふより起るものなれば、世の母たるものは、生兒の眼を清潔にすることに注意せざるべからず。亦子の眼病は誕生のとき汾泌する毒と誕生後清潔にすることを怠るより生ずるものなり。故に赤子の眼が少しでも惡き時は即刻醫師に見せよ。若し醫師が間に合はぬならば自ら冷水を以て善く眼を洗ひ遣るべし。一眼惡しきときは忽ち他の一眼に傳染するもの故惡き方の眼より出る病毒を善き方の眼に接せしめざる樣注意すべし。毎日醫師に見せしむるを得ざるものは自身で冷たき濃き茶若くは鹽水(冷水の一パイント(量の小茶匙一杯をいれたるもの)を用て、毎二時間乃至四時間若くは一層度々善く眼を洗ひて膿の溜る暇なきようにすへし、斯くして極少なりとも膿の出る中は洗滌を止めるべからず。洗眼の方、先づ兩膝の間に小兒の頭を置き左手の指を以て靜にその眼瞼を開き、右手を用て前述の水へ漬したる小さき柔なる布片或は綿を用て、膿の拭ひ去らるゝまでたでるべし。眼蓋が腫れること甚しきものは、冷き布片(なるべく氷にて冷したる)を宛て、温になれば幾度も取換へ一二時間つゞけたる後、一時間ほど眼を休ませ、又この所作を繰り返し、腫れの引まてこれをなすべし

時報

◎婦人矯風會の請願事件

婦人矯風會の一事業として六年以前より每年議會に請願したる在外賣淫婦取締法案並に刑法及び民法改正の件に付きての請願書は、今年度もまた/\矢島楫子氏以下六百有餘名の連署を以て、議員の紹介により、貴衆兩院へ提出せられし處貴族院の請願委員會は多數の賛成者を有し、結局好結果を收むべきの見込ありしといふ。されど衆議院の請願委員會は、委員出席總數廿四名の中、可とするもの十二否とするもの十一、即ち一の少數を以て否決せられたり。

◎明治女學校の新校舍

明治女學校は昨年二月五日不慮の災に罹りて類燒せし以來、對策經營の氏、大方

の義捐贊助を仰ぎ來りし處、此程府下北豐島郡巢鴨村字庚申塚に、宅地五千六百坪家屋百二十坪を購求し、四月の新學年度より同所に移轉の運びに至れり。右地處は二町計の地面を有し、諸種の樹木作物等の栽培に適宜なれば、學業の傍ら女生をして園藝を修めしめ、實地家政の一助となさんとす。なほ同所現在の建物のみにては、到底手狹なるに付、漸次增築の計畫にて、更に有志の贊助を請へり。既に數多の教場、音樂室、武道教場、新講堂等の新築寄附を豫約したる向もありといふ。

◎奈良女學校　奈良縣立高等女學校は昨年四月縣會に於て設立の事を決議し、直ちに大佛殿の側に校舍新築の工事に着手し、此程竣功を告げたれば、來月二日第一回卒業式を兼て落成式を擧行するよし。

◎福島縣寄附　臺灣征討軍人慰勞婦人會より此程寄贈品配付方を福島縣廳へ依賴したるは北白川宮妃殿下の御詠歌色紙及酒肴料五十七錢づゝにして、其總人員千三百六十五名に對する酒肴料總額七百八十八圓五錢なりと云ふ。

◎赤十字篤志看護婦會の寄贈　同會は今般鍋島侯爵夫人、並に伊藤侯爵夫人の名を以て、廿七八年の事件の救護員たりし看護婦一同へ懷中鉛筆一本づゝを寄贈せしなり。

◎獨乙最始の婦人倶樂部　本年一月一日獨乙國伯林府にて初めて獨乙婦人の倶樂部なるもの創立せられたり。其組織は米國風に則とり、會員は文學、美術、科學社會事業等に關係せる婦人は、階級種界の區別を論ぜず網羅し、以て婦人の共同團結を計るに在り。會頭はミンナ、コーエル夫人といふ

◎福島保姆學校　福島町の信夫柳太郎渡邊わか子の兩氏二三年以前より、子守教育の事を工夫し、昨年九月に至りて、自ら市街に出で、子守等の驚き怪しむを賺し慰めて集めよせ、はじめて子守教育の端緒を開き保姆學校を設けしが爾來實驗漸く積み、事務追々に緒がり、衆望漸高まりしかば、福島町にて之を譲り受け、町の事業として、福島小學校に置き、大に其擴張を計れり。

◎孝婦に賞與を賜ふ　德島縣板野郡瀨戶村藤井重藏の妻お淺(三十四歲)と同村経切武賀の妻お芳(二十六年)とは孝貞全き賢女なるを以て、同村同志會の有志三十餘名は賞狀に金若干を添へて兩女の許に贈りたりといふ。(万朝報)

義捐者諸君に敬告す

此度府下巣鴨村六百五十六番地通稱庚申塚に宅地五千六百坪、建家（西洋館及日本家双方二階造）一百二十坪を購入致し來る四月新學期より移轉、尚ほ追々增築可致計畫に御座候。類燒后一周年にして此の良好の場所を得候事、偏に諸君仁慈の致す所たり。謹で敬告し併せて無限の謝意を表す

明治三十年二月

明治女學校

新入學希望者に告ぐ

來る四月以后府下巣鴨村に新校舍を設置し、新入學を許可す。此地、本鄉區を距ると遠からず、通學の便なきにあらずと雖ども、可成く寄宿篤學を可とす。入校希望の人は、來る四月十五日迄に申込まるべし。

東京麹町區下六番町六番地

明治女學校

編輯主任 布川靜淵

社會雜誌

毎月一回 五日刊行

●初號、來四月五日發刊

『社會雜誌』は人間の歷史的發達一般社會の進化開展の理法を究め親しく實際社會の生活を調査し社會改良の方針を示さんとを期す

『社會雜誌』は社會學、社會主義、社會問題等に關する諸般の事件を論議する專門雜誌なり

『社會雜誌』は貧富の懸隔、地主と小作人との關係、資本家と勞働者との衝突等より來る諸種の問題に就て討議し、其の弊害を除去せんとを期す

『社會雜誌』は孤兒院救助院感化院其他一切の慈善事業の現況、組織、沿革等を叙し、之を淘汰し、之を助長せしむるとを期す、犯罪、監獄問題の如き特に力むる所とす

『社會雜誌』は人情風俗氣風等の社會心理的現象を研究し、國民精神の所在を明かにし、時代の精神に向つて正確の批評を試みんとす

『社會雜誌』は社會行政及び社會經濟上の問題を議すると同時に、現在政界の運動より教育界の觀察を爲し、之を論評す

『社會雜誌』は徒らに社會制度を破壞せんとする者に與せず、而も思想界に立て根本義より、社會の改良を計らんとを期す

『社會雜誌』は左の諸欄を置く。

◎論說 各自署名し責任を持して以上の諸項に關する詳細の論說を載す

◎時論 最も痛切なる時事問題に關して論評す、必ずしも毎號之を置かざるべし

◎雜纂 斯欄は特に編者の意を注ぐ所、凡て歷史的統計的調査したるもの、實際生活を探險したるもの、及び當時の大事件に關する顚末等を載す

◎思潮 他に編者の主任たる『日本宗教』思潮欄の如く公平無私の觀測を爲す、社會學社會主義廣義の社會、經濟問題に關する時論を網羅して、記者の論評を試む

◎通報 重要なる社會的運動の顚末を叙述し、有益なる材料を蒐集して之を報道す

『社會雜誌』は要之政黨政派に關係なく宗教上の宗派に拘泥せず全く社會學的見地に基礎を置くもの彼は權威全力を以て一歩も動かず唯眞理の爲めに身命を犧牲さんとする者也上層社會には義務心を發揮せしめ下層社會には適當の生活を得せしめんとを欲するもの也貧民の友となり勞働者の味方となり小地主小作人の爲めに警鐘を訴へ以て人類の價値を高め國民の進歩を計らんと欲す

定價 一冊十錢 郵稅五厘 一年前金郵稅共金壹圓十錢 半ヶ年郵稅共六十錢

廣告料 一行十錢割引なし

發賣所 麹町區下六番町六番地 社會雜誌發賣所

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女子習字帖全部刻成廣告

女子高等師範學校教務屬囑岡田起作先生編幷に書
文部省檢定出願中

一女子習字帖　第一定價金十錢　第二定價金十錢　第三定價金十貳錢　第四定價金十五錢
一鳥丸帖　上卷定價金十八錢　下卷定價金廿錢
一閑雛帖　定價金拾貳錢

右は岡田先生多年の實驗に依り女學校生徒の教科に充つる爲め書せられたる習字帖にして今般全部出來候何卒御採用の程希望の至りに存ず

岡田起作先生書
嘉言帖　楷書全一冊　定價金拾四錢
檢定濟
眞書金言集　定價金十錢
檢定濟
行書蘭亭帖　定價金十二錢
行書赤壁賦　定價金十二錢

右は尋常中學尋常師範學校教科用に充る目的にて書せられ候ものに有之候間御採用の程奉願上候

發兌書肆金昌堂　東京日本橋區本石町三丁目廿三番地　杉山辰之助

明治女學校圖書寄贈報告

第四回

一正教と國家○勅語正教解○有神略論各一冊　石川喜三郎殿
一和文教科書○源氏物語○土佐日記
竹取物語○スヰントン英文學　草野タメ子殿
一普通物理學教科書　一部　三守守殿
一日本女鑑○日本女訓○日本女訓教師用各一部　根本莞爾殿
一普通生理學教科書○斯氏女德新説
實驗化學○實用普通簿記○方丈記評釋
西洋樂器目錄○學校管理法提要○音樂雜誌
男女普通禮法○おもがく○支那征伐物語
教育勅語衍義○祝祭日唱歌樂譜　共益商社殿
一地理教科書○算數學　各一部　野口保興殿
一初學代數學○算術中等教科書○ニウトン氏傳　長澤龜之助殿
一地方政治論　久米金彌殿
一普通倫理學　二冊　和田万吉殿
一財政原論○教育制度○獨逸文法教科書　寺田勇吉殿
一方鑒必携○方鑒大成三冊　尾島碩聞殿
一はゝのつとめ　三島通良殿
一作文教授法○國語のため　上田萬年殿
一英文典○日本商工業要覽○グランド一代記
セイクスピーヤ全集○代數○幾何學○統計學論
日本帝國統計摘要○理論統計學
ローヤルステーショナルフサヤチー　吳文聰殿

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
頁數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅　八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝこと數十回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや。少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史嚮に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、嘗て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を乘る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるると切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は序を題し、鄕友松非昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館
大賣捌　東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

社告

鈴木弘恭大人講述
布川靜淵、小此木秀野合著
百人一首講義
正價金廿八錢
郵稅四錢

俳諧史傳
定價二十七錢
郵稅四錢

巖本嘉志子
若松賤子英文集
正價六十錢
郵稅四錢

ベビー手みおん
正價五圓

明治廿七年二月十四日内務省許可
明治三十年三月十九日印刷
明治三十年三月十日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY